

# 無自覚な吸血鬼の王

トイレの紙が無い時の絶望を司る神

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

### 『紅魔館』

そこは、吸血鬼を筆頭とする猛者が集まり、一つの勢力を作り上げた館。

館の主、レミリア・スカーレット

その妹、フランドール・スカーレット

もしも、その他に、全てがひれ伏す高貴な王者の風格をたなびかせた吸血鬼が居たら……。

(お腹空いたなー……)

「ヒイ!! 王の機嫌が悪いぞ!!」

(眉間にシワが少し寄っただけ……………)

同時に、実は中身は非常に残念で、風格だけで勘違いされていたら……………。

# 目次

王者の朝は遅い | 1

王者にも過去はある | 8

王者以外の印象　そして、進撃 | 16

王者、突入す（上） | 24

王者、突入す（中） | 33

王者、突入す（中2） | 39

王者、突入す（後） | 47

【裏話】襲撃者の心境 | 63

戦争の結末 | 73

紅魔館、始動 | 78

紅霧異変：巫女、発進 | 85

一方その頃…… | 92

暴れ巫女と方向性を間違えた吸血鬼（前） | 98

暴れ巫女と方向性を間違えた吸血鬼（中） | 105

暴れ巫女と方向性を間違えた吸血鬼（中  
2） | 112

暴れ巫女と方向性を間違えた吸血鬼（後） | 116

【裏話】暴れ巫女とカリスマ吸血鬼 | 123

ロミオの過去 | 131

謝り倒す吸血鬼 | 137

妹様と王（笑） | 144

人里の様子と王の視察	150
終わったら大体これ：計画	154
番外編 もしも主人公が一人しかない系	
系の妖怪だったら 前編	159
番外編 もしも主人公が一人しかない系	
系の妖怪だったら 中編	165
番外編 もしも主人公が一人しかない系	
の妖怪だったら 後編	173



## 王者の朝は遅い

私は十六夜咲夜。ここ、紅魔館のメイド長をしている。

私の主であるお嬢様を起こし、寝ぼけている間に時を止めて撫で回した後に、そそくさと仕事をするのが日課だ。

ああ、今日も1日が始まる。

それはそれは素晴らしいことだ。

素晴らしいことなのだが……。

瞬間、館は圧倒的な存在感に包まれる。

お嬢様から本当にたまに感じられる『カリスマ』と俗に言われる物とは別種の、『風格』と呼ばれる物。

普通なら、そんなのが館を覆えば、パニックになること間違いなしなのだ……。  
実はそれはいつものことなのだ。

その風格が溢れる大元の元へ時を止めて急いで向かう。

少し、遅れてしまった。

ドアを開け、そのお方が普段寝ているベッドに視線を移す。体を起こし、外を眺めている様だ。

整った容姿、全てを見通すかのような眼差し、そして隙だらけの体。ただ勘違いしてもらいたくないのだが、隙だらけなのは、一に王者の余裕と言うものだろうと思う。

「おはようございます、『ロミオ』様」

能力を解除し、僭越ながらこのお方の名を口にする。

最初は口にするだけで体が固まったが、長らく紅魔館に仕えてきたせいか、失礼ながら慣れてしまった。

『…… ああ、咲夜か』

穏やかに、しかし重みを持って言葉を発する。

まるで言葉自体が質量を持つてるかのように。

『おはよう。随分と、遅くなっちゃったようだね』

このお方は、起きた時に私が傍に居なかつた事を疑問に思った様だった。いつもなら起きる前に傍らに身を置くことが普通になっていたから。

『咲夜にもそういう時があるのだな……』



「も、も、申し訳、ありません……」

遠回しに遅れたことを責められる。

ああ、視界が眩む。

私はここで死ぬのだろうか。

『いや、良いんだ。こちらにも、非はある』

それは、自分がメイドの育て方を失敗したと言うことだろうか……。

——私は、このお方に愛想を尽かれてしまったかもしれない——

そんな考えが頭を過ぎり、顔から血の気が引いていく。

『何を顔を白くしているんだい？ 具合でも悪いのかい？』

「わ、私は…… 貴方様を起こさなければならぬのに…… 遅れて…… !!」

『…… 失敗なんて誰にでもある。私もたまにするよ？ 気にしなくてもいい』

お許しをもらった。

血の気が戻っていく。

許しをもらった安堵で、その場に倒れ込みそうになるのを歯を食いしばって堪える。

お許しをもらったのだ。イジイジしてはそれこそ無礼な行為だ。

時を再度止め、朝食を持つてくる。

「お待たせさせてしまい申し訳ありません。遅ればせながら、朝食をどうぞ」  
『ああ、すまないな』

従者に礼を言う変わった王。

以前、ここ紅魔館で騒ぎがあった。

なんとこのお方は、自分の扱いは普通でいいと言い出したのだ。

お嬢さまはそれに対して反論した。

『私はここに住まわせてもらっている身だ。あまり、特別扱いはしなくていいのだ  
が……』

『ダメよ!! 貴方を蔑ろにするだなんて、想像もしたくないわ!!』

こうしてお嬢様との口論の末、根負けして、特別扱いを洩々受けている。

しかし、特別扱いに異議を唱えるお方は居なかった。

逆に、「こんなんじゃないわよ!!!」と文句を言うお方はいた。

主にお嬢様だが……。

特別扱いというのは、お嬢様への命令権を持つていることだ。

お嬢様が「貴方は、そこに居るだけで良いのよ。それだけで十分よ。いや、本当に。」

と言ったことで再度口論となり、またもやこのお方が折れ、この扱いに収まったのだ。考え事をしているうちに、お食事が終わったようだ。

『ありがとう。今日も美味しかったよ。あとは着替えるだけだから、レミアアの所にも行ってあげてくれないかい？』

「お手伝いします」

『1人で着替えられるよ』

「……かしこまりました」

失礼しますと言って、外に出る。

お着替えのお手伝いをしようとするといつもこう言われ、外に出される。

お嬢様は「さくやあ、ふく〜」と寝惚け眼でせがんで来るといふのに……。

「はあ、疲れた……」

そう小さく呟く。

部屋に出るとあのお方の風格が少し薄れ、体が楽になる。

さて、言われた通り、お嬢様の所へ紅茶でもお持ちしよう。

私の名前はロミオ・スカーレット。

レミリア達の親戚だ。

年齢は華の700歳。ピチピチの吸血鬼だ。

最近レミリアが朝に起きるので、私も朝に起きているのだが……いかんせん朝に弱い。吸血鬼だから当たり前だが。

私はここに住まわせてもらっている身だ。本来は、誰よりも早く起きて掃除でもしないといけないのだろうが、優しいレミリアは以前私が朝早くから掃除していると、『貴方は寝ていれば良いの!!』っていうか寝ていてちょうだい!!』と言って私を部屋に押し込んでしまった。

あくまでも私をお客様扱いしたいのだろう。

窓から外を見ると、もうお昼近くみたいだ。

……寝すぎだな。

「おはようございます。ロミオ様」

咲夜ちゃんがそう言って部屋に現れる。

「ああ、咲夜か」

そう言って綺麗なお辞儀をしてくる咲夜ちゃん。

……正直言つて、自分より格上の強さを持つ咲夜ちゃんに様付けされるにはどうも慣れない。

私は、確かに普通の人間と比べれば言うまでもなく強いが、所詮普通の吸血鬼程の強さしか持っていない。

だが回復力と再生力だけは吸血鬼の中でも高いと自負している。

だがそれだけだ。咲夜ちゃんに滅多刺しにされてしまえば呆気なく死ぬだろう。

「おはよう。随分と、（起きるのが）遅くなってしまったようだね」

そう言くと、起こすのが遅くなってしまったのが悪いと思つたのか、謝ってくる。

気にしないでいいと、こちらにも非があると言うと、更に顔を白くしてしまった。

……働き詰めで疲れているのだろう。

心配すると、嬉しそうな顔をした。それも泣かんばかりの笑顔で。

……これは、レミリアに言つて休暇をあげなければ。

咲夜ちゃんの料理は今日も美味しい。

メイドの性からか、着替えも手伝おうとする咲夜ちゃん。

恐らくレミリア辺りが朝にでも手伝つてもらっているのだろう。

……まだフランちゃんの方がしつかりしてるよ。

## 王者にも過去はある

「……………」

私、レミリア・スカーレットは、少し物思いにふけていた。

何を考えていたわけでもなく、ただただ少し昔を思い出していた。

『すまないが、匿って貰えないだろうか』

彼は、なんでも無い日に、唐突に訪れた。

当時私は200歳程だったと思う。

彼を見たその瞬間、自分なんぞとは格の違う存在だと思いつた。

「うあ…… ああ…… !!?」

それに気圧されて、まともに声が出なかったのを記憶している。

『…………… 緊張しなくていい。楽にしてくれないか?』

その一言と共に、全身から力が抜けた。

体の芯から緩んで、恐らくだらしがない顔をしていたと思う。

先程の上どころか全方位から握りつぶされるような威圧感とは一変して、どこか浮き足立ってふわふわとした綿に包まれた様な空気が私を包んだ。

「え、ええ…… ありがとうございます」

それでも、その頃はまだ本能的に彼を上位の存在と認識してしまっていた。

…… 今も一緒だが、今は当時に比べて軽いと思う。

もちろん、匿うと言うのにはOKを出した。

断ったら何されるかわからなかったし……

『私の名はロミオ・スカーレット。君の家であるスカーレット家の、いわば親戚だよ』

彼はロミオと名乗った。

それに私は「ロミオ…… と言われるのですか」とぎこちない返事をした。

『敬語はやめてくれ。私は、これからここに住まわせてもらう身なのだから』

そう彼は言うが、無理な話だ。

彼を前に軽口が言える奴は、よっぽど気が大きいか、同格の存在だけだろう。

…… そういえば、彼の威圧感を気にせず相手できるのが1人居たわね。

妹のフランである。

あの子だけは最初から普通に接していたわね……

まああの子は少しアホの子の気があったし……。

話を戻そう。

今でこそ慣れのせいで普通に会話できているが、当時はガチガチだった。朝に会うだけでもまあ大変だった。

「お、おはよう、ごさいましゅ」

カミカミでそう言うのがやつとだったのだから。

そこから、およそ290年。

今ではパチクリーや咲夜も彼には慣れ、なんとか普通に接することができている。

ただ、あまり会うことのない美鈴は慣れきつて居ないようだ。

「はあ…… 彼にはもつと自覚を持ってほしいわね」

これはこの屋敷に居る全員が思っている事だ。

彼には自分がどういう存在なのかということと、自分の影響力への理解と自覚が足りていないように思える。

彼自身、自分を普通の吸血鬼だと思っているようだ。



勘違いも甚だしいが、誰が何度言っても笑いながら否定するのみだ。最近はずわざとやってるのかと思うこともあった。

「失礼します。お嬢様」

咲夜が来た様だ。

紅茶のいい香りもすることだし、少し早いがおやつの時間にしよう。

なんだか、彼のことを考えるのは疲れるのだ。

そういえば、ここに来た時のレミリアは凄い『恥ずかしがり屋』だったよね。

何かを言おうとしているのだが、「ああああ………」と、口をアワアワさせて戸惑っていた。

私が緊張しなくてもいいと優しく言うと、心底安心した子供の様にほっと笑った。

とても可愛かったなあれは。

その後どもりながらお礼を言つて、いい子だと思った。

そして私に慣れるまでは、喋る度カミカミでその都度顔を赤くしていた。あれも可愛かった。

「ロミオオ、もつとモット遊ぼうヨオ!!ねエ、良いヨねえ!!?」

「ああ、いいとも。だがあまり強くしないで貰えると嬉しいのだが」  
今私は、地下室でフランちゃんと遊んでいる。

パチュリーちゃんからの頼みでだ。

レミリアに狂気を持っていると言われて引き篋もつたらしい。

全く。ちよつと癩癩持ちなだけでそれとは。

レミリアには姉としての自覚はあるのだろうか。

前々から、月に3回程程度の頻度でこうやってフランちゃんの遊び相手になっている。

まあ、こんな所に入つてずっと動かないのもあれなんだろう。

だがこの子、力と能力が強くて遊び感覚の攻撃が一撃必殺になるのだ。

再生力の高い私が相手だから良いものを……。

「やっぱりロミオとのオアソビはたまらないよオ!!!」

不思議だよねエ!!目を潰してコワシテるの!!!治つちやうんだもん!!!」

とても嬉しそうに突撃してくるフランちゃん。

受け止めようとしても勢いが強過ぎるので、躲すしかない。

そんなフランちゃんを相手できるのには理由がある。

俺の能力は『再生する程度の能力』。

治る傷はもちろん、普通なら治らない傷もすぐに治る。痛みはあるがな!!

「ねえロミオオ、フランとずっと一緒に居ようよ!! あんな上の奴らなんか気にしないで、ずっとフランと居てよ!! ネエ、イイヨねえ!? ロミオオオオオオ!!」

「心配しなくても、フランから離れるつもりはないさ。だからこうやって遊びに来てるんじゃないか」

「いや!! ずっと!! ずっとがイイのお!!」

フランの一撃で地下室の壁にクモの巣状にヒビが入る。

本当に強いなあこの子(震え)

「安心しろ。私はずっとフランと遊んでやるとも」

駄々をこねるフランちゃんの頭を撫でる。

すると、俺の腕を取って掌を自分の頬を擦り付ける。

ああ、頬を撫でて欲しかったのか。

そう思っただけで優しく撫でてあげる。

「ロミオオ、好き、スキ、スキ、好き、好き、スキイ!!」

それが嬉しかったのか俺の腕に抱きついてくる。

暗い地下室に籠っているせいだろう。人恋しいんだろうなあ。

子供特有の直球な好意にほっこりしながら、続けて撫でてあげる。すると、フランちゃんが私の指に噛み付いて血を吸い出す。

なので、もう片方の手で逆の頬を撫でてあげる。

気持ちよさそうに目を細くする。

「ん、んちゅ、ちゅう、ちゅぶ、ちゅば、ちゅく、プハア」

美味しかったのか、幸せそうな顔をするフラン。

落ち着いたようなので、そろそろ休憩しようと提案する。

流石に疲れた。

「フラン、少し休憩するか？」

「うん!!」

元気よく返事するフランちゃん。

可愛いので撫でてあげる。

「んく♪ロミオの手は気持ちいいね!!」

うん、今日も良い笑顔だ!!!

そこからフランちゃんは、遊び疲れたのか寝息を立て始めた。

フランちゃんを静かにベッドに置く。

なんだか私も眠たくなってきたので、フランちゃんのベッドの横で私も眠ることにする。

フランちゃんが、良い夢を見れるように願いながら。

## 王者以外の印象　そして、進撃

ロミオ・スカーレット。

その名を聞くだけで大体の吸血鬼は顔を真っ青にする。

彼は、吸血鬼が誕生した起源よりも前から存在しているとも言われている。

だが実際はそうではなく、(本人曰く) 700年程しか生きていない。

更にいえば、吸血鬼の王等と言われているが、本人は認める気は無いらしい。

どうしてこれ程までに噂が一人歩きしたのか。

それは、やはり彼の雰囲気にあるのだろう。

全てを圧倒するかの様な強烈な圧力。

そして、全てを包み込むかの様な雄大さ。

更に、今まで誰も傷つけることさえ出来なかつた彼の實力。

やはりどれもが圧倒的で、しかし誰もが認める様な存在。

『彼ならば、王に相應しい。いや、王になるべき存在だ』

彼に会った者は口々にそう言う。

かくいいう私もその1人だ。

いや、この紅魔館に居る全てがそう口を揃えて言うだろう。

「パチュリー様あ、お茶をお持ちしましたあ〜」

「ありがとうこあ。そこに置いておいてくれないかしら」

「はあ〜い」

私こと、パチュリー・ノーレッジが何故今彼のことを考えていたかと言うと……。

〈ドカン!!〉

〈バーン!!〉

〈……ドグシャアアアア!!〉

「は、派手にやってますね」

こあが青ざめた顔で口元をヒクヒクさせながら言う。

「いつものことですよ」

「で、でもお……もし何かの間違いで出てきたりしてしまつたら……!!」

「……こあ、まさか貴女」

私は、杞憂なことを考えている使い魔に優しく諭すように言った。

「彼が負けると思つているのかしら?」

思わずクスクスと笑いが出してしまう。

全く、私の使い魔は面白いことを言う。

「い、いえ…… そうじゃなくて、もし妹様とあの方が戦いに必死なせいで、地下室から出てきたりしてしまつたら!!」

「大丈夫よ。大丈夫」

「そ、そうなら良いのですが……」

心配性な使い魔を宥めながら、私は本を閉じて紅茶をゆつくり飲む。

〈グチャア!!〉

〈ブシャアアア!!!〉

〈バキン!!ブチイ!!!〉

明らかに戦闘で出てはイケナイ音が聞こえる。

「ひ、ひううう……」

本で頭を庇いながら蹲る使い魔のこあ。

こうなつてしまつたら、アレが終わるまで動かない。

今、地下室では彼がフランの狂気を宥めている。

これは私が紅魔館に来る前から行われていた事だ。

月に何度かフランの狂気が抑えられなくなり暴れ出すのをいつも彼は一人で、しかも

迅速に対応して事を収める。

これ程のことができるのに、彼は自分が弱いと言う。



謙虚もここまで来ればもはや皮肉である。

「…… 本当に、訳が分からないわ」

それは私が彼に抱いている感情。

わけがわからない。なんだかそういうしか無かった。

フランは、生まれてすぐ地下室に閉じ込められた。

危険な力を持っているせいで、アイツに閉じ込められた。

だけど、そのことには怒っていない。

それ自体は良い判断だと思うし、多分フランでもそれなりのことをしていたと思う。

だけど、アイツの事を姉妹には思えなかった。

それもそうだ。

生まれてすぐにここにフランをぶち込んでから、一向に顔を見せない。

多分、フランのことは気にしてないのだろう。

まあ？別にいいんだけどね!!

「ロオオミオオオオ!!!」

ロミオに会えるだけでフランは充分!!

むしろそれ以外いらない!!

「来いフラン。出来る限り受け止めてやろう」

今フランは一芝居打っている。

狂気に飲まれたフリをすれば、欠かさずにロミオは駆けつけてくれる。

それが、堪らず嬉しいの。

最初に会ったときは、またおかしな玩具が来たと思った。

思わず能力を使ってしまい、またやってしまったと思った。

だけどロミオは、倒れることもなくフランと会話を続けた。

なんだか、ただそれだけで救われた気がした。

会話を普通にできる相手が居るだけで、こうも救われるものなんだ。

フランってチョロいかな？

だけど、やっぱりロミオもフランから離れた。

そろそろ戻ると言って、上に行ってしまった。

仕方ないか。私は狂っているのだから。

狂っている奴と一緒に居たい奴なんて、そう居ない。

たぶん、ロミオが変なだけだ。

ある時、フランは狂気に飲まれた。

たまに発作のようにある狂気の奔流。

今回のそれは、いつもより大きかった。

そのせいで、フランはあつという間に飲まれてしまった。

その時からだ。フランが狂ったら、欠かさずに駆けつけてくれるようになったのは。

気が付けば、ロミオに抱かれて寝ていた。

ロミオも寝てたけど、フランが起きると同時に目を覚ました。

「ああフラン。よく眠れたか？」

笑顔でそう言いながら、私の頭を優しくポンポン叩く。

その度に、ロミオの香りがフランを包むの。

多分だけど、この時からかな。

フランが、ロミオしかいらなくなったのは。

わがままでと知っていても、フランの側に居ると嘆く。

たぶん、フランが本気で頼めばその通りにしてくれると思う。

けど、それはダメだ。

ロミオの迷惑になる。それだけはダメだ。

いつか、フランもロミオと一緒に暮らせるようになってから、フランからロミオの側に寄り添うようにしたい。

フランは、今それだけの為に努力している。

だから、待っててね？ロミオ。

他に女なんか作ったら、間違いなくコワシチャウトオモウカラ。

「クックック……アハハハハ!!!」

『レミリア、やかましい』

「ゴメンなさい」

レミリアがなんだかハイテンションだ。

何が嬉しいのか、ニタニタしている。

すると、パチュリーちゃんや咲夜ちゃんが集まってきた。

それだけでなく少し待っていると、エントランスには大量の使い魔や、多分だが自分

よりも圧倒的に強いだろう吸血鬼達が集まっていた。

つらつらと演説を行うレミリア。

私は意味がわからず、ただただ混乱していた。

「お、おい。王の機嫌が悪そうだぞ」「大丈夫なのか!? 幻想郷なる所に進撃する前にここで全滅するとかシャレにならないぞ!」「と、とにかきゅ、これ以上機嫌をしょこねないようにしてだな……」「落ち着け!」

なんだかガヤガヤしてるな。

「長々と演説するのも飽きた。簡潔に宣言しよう。」

!!!  
「諸君!!! 幻想郷なる地を我ら吸血鬼の手中に叩き落とし、我らの存在をしらしめようぞ!!!」

『うおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおお!!!』  
血気盛んに叫ぶ使い魔と吸血鬼。

……え? 何? 戦争でもするの?

## 王者、突入す（上）

「パチエ、準備できた？」

「ええ。今すぐにも行けるわよ」

なんだかまた物騒な話をしている。

少し状況と予定の説明をしてくれないか。

「…… あなたからは、何か意見はある？」

状況分かってないのに急に話を降らないで下さい。

いや、本当に。何がなにやら。

ここはとりあえず。

「…… いや、無い。レミリアの好きにすればいい」

解つてますよオーラを出しながら信頼してるんだぞ風な雰囲気醸し出して誤魔化す。

場の雰囲気壊すのも忍びない。

…… 大丈夫かこれ。

「そ、そうかしら!? わ、わかったわ」

レミリア、なんで驚いたの？

え、もしかしてバレた？バレたの!？」

「パチエ!!こうなったら失敗は許されないわよ!?!いや、本当をお願いよ!！」

「レミイ!!あ、あまりプレッシャーを与えないでちょうだい!!」

なんだか、ワタワタしでした。

やっぱあれかな。

私が理解できてなかったのは計算外で、ここからの計画に何らかの支障でも出たのだろうか。

レミリアの能力ならそれが解るからな。

…… すいません。

「いくわよ!!レミイ!!」

「ええ、ええ!!行つてちょうだい!!」

パチュリーちゃんが描いた大きめの魔法陣が輝きだし、使い魔達にも緊張した雰囲気  
が流れる。

「転移魔法起動!!」

その一言と共に、視界が真っ白に染まった。

「いよいよ、幻想郷への突入だ。」

「以前会議した順序通り、パチエが転移の魔法陣に魔力を注ぎ出す。」

「パチエ、準備できた？」

「ええ、今すぐにも行けるわよ」

よし。順調の様だ。

なので、彼に最終確認をすることになった。

あの二月程前の会議で……………。

☆

二月前……………

「……………これが、幻想郷を落とすにあたっての順序よ」

『まず、できるだけだけの吸血鬼や使い魔を呼び出し、戦力を揃える。』

次に、パチエの転移魔法で幻想郷の中へ入り込む（その日付は、次の満月とする）

管理者に、挑戦状を叩きつけ、総力戦で打ち勝つ』



「……随分ストレートなやり方ね」

「そっちの方がわかりやすいでしょう？」

会議は順調に進んでいた。

ここで、私はあることに気が付いた。

（……彼の重圧を感じない）

そう思つて彼の方を見てみると、彼は目を瞑つて瞑想しながら静聴していた。

（そうか、会議の邪魔にならないように……）

彼の重圧があれば、きっと全てが彼の指示になつてしまう。

そう彼は思つて、普段の威圧感を抑えているのだろう。

（気を使わせてしまつてゐるわね……）

だが、そうしたければ全部彼の王気に持つていかれてしまうだろう。

やはり彼は聡明だ。

「……貴方も、これでいいかしら？」

一応確認を取る。

「……」（コクリ）

彼は無言で頷く。

言葉を発するだけでも、彼の存在感は漏れ出てしまうのだろう。

「じゃあ、もし何か不備があると思ったら、確認するからその時言ってくれないかしら」  
「……………」(コクリ)

最終確認を彼に任せることにした。

聡明な彼ならば、何か問題が発生する時もいち早く察知してくれるだろう。  
一応、私も能力を使って確認はするが、運命の糸は一つではないのだから。

「……………」  
ZZZZZZ

☆

といったことがあったのだ。

「あなたからは、何か意見はある？」

吸血鬼や使い魔も、一瞬で張り詰めた顔になり彼の言葉を待つ。

そして返ってきた言葉は……………。

『いや、無い。レミアアの好きにすればいい』

……固まってしまった。

彼から発せられたのは、その一言と、そこから発せられる彼からの莫大な信頼。

「そ、そうかしら!? わ、わかったわ」

これは……失敗でもしてしまえば、私に明日は無いんじゃないのだろうか。

「パチエ!! こうなったら失敗は許されないわよ!!」

「レミイ!! あ、あまりプレッシャーを与えないでちょうだい!!」

パチエも一層緊張が籠った顔になる。

そして先程よりも緊張した面持ちで魔法陣に魔力を注ぎ込む。

「いくわよ!! レミイ!!」

「ええ、ええ!! 行つてちょうだい!!」

そして、パチエが転移魔法を起動した。

---

光が収まると、そこは森の中だった。  
屋敷ごと転移させたのか。

流石パチュリーちゃん。とんでもないことをするよね。

「成功、したかしら」

「ええ、ついに来たのよ」

窓を開けると、まだ日が登ってないのか、少し薄暗い。

だがしかし、先程とは違い、体の隅々にまで行き渡るかのような綺麗な空気が流れ込む。

「ここが、幻想郷よ」

そこには、羽根の生えた小さな女の子達が飛び、見たこともない程に澄んだ湖が広がっていた。

後になれば解るのだが、そこは霧の湖と呼ばれている場所だった。

「さて、まずは挑戦状ね!!」

レミリアは、意気揚々と部屋に入ってしまった。

---

「紫様、如何がなさいますか？」

式の藍がそう聞いてくる。

突如現れた真っ赤な屋敷。

恐らく西洋の妖怪だろうことは一目見てわかった。

「そうねえ……少し様子を見て……!?」

「ど、どうかなさいましたか?」

屋敷にスキマを繋ぎ、中を見ようとした瞬間、とてつもない威圧感が溢れ出てくる。

威圧感の出処はすぐにわかった。

あの男だ。蝙蝠の様な羽を広げ、少し高めの場所で陣取っている男。

その下には、同じ様な羽を生やした妖怪と、無数の異形で埋め尽くされていた。

その広さと数は、おおよそあの屋敷には入り切らないだろう規模だ。

その男からは、同時に強い存在感が滲み出ていた。

自分を知らしめるような。

生物の上に立つことが運命付けられた様な圧倒的な存在感。

それも恐らく、無意識に放っている物だろうことは、表情を見ると分かった。

勝てない。

あれは、自分よりも上の次元の存在だ。

見ただけでそう思い知らせて来るような重圧感。

カリスマを極めればこうなる、といった感じだろうか。

頭に浮かんだ考えを振り切り、アレに呑み込まれないように踏ん張る。私は、それでなんとか凌げた。

「グッ……!!」

「藍……!!?大丈夫!?!」

が、藍はそうじゃなかった様で、青ざめた顔で膝をついている。

私は急いでスキマを閉じた。

その際に、一瞬あの男と目が合った。

まるで、こちらを歯牙にもかけていない様子だった。

……ん?

今さっき何か変な物が浮いていた様な……? ?

気のせいかな。

## 王者、突入す（中）

「さて!!挑戦状を送ってはや2日!!いよいよ今夜が決戦の日よ!!」

ふんすと張り切るレミリア。

満月の日だからか、使い魔や吸血鬼達もどこか血の気が多くなっている気がする。

かくいう私も、体の調子が良く、つい上機嫌で喋ってしまう。

「永い夜になりそうだな。フフフフ……」

瞬間、その場が静まり返った。

…… え?イジメ?イジメなの!?

…… もういいもん!!フランちゃんの所に行く!!

うわーん!!レミリアなんて!!レミリアなんて!!

お漏らしでもして咲夜ちゃんに笑われてろー!!!

---

「な、なあ。今の王の顔を見たか?」「ああ。ありや、やばいことになりそうだ」「死なな  
いと良いなあ……」「バカお前!!まだ死んだって決まったわけじゃないだろ!!」「そう

だそうだ!!ワラでも何でもいいからしがみつく勢いで生きるぞ!!」

使い魔や吸血鬼が騒ぎ出す。

かくいう私も、彼の笑顔を見てから固まってしまっていた。

まるで、底冷えのするような笑いだった。

今まで感じていた威圧感が急に冷気を帯びた様に冷えた。

彼が何をするつもりなのかは知らないが、とんでもないことが起きるだろう。

「ああ……。胃が痛くなってきたわ」

咲夜に胃薬を頼んで、少し落ち着くために椅子に座った。

「へー……。幻想郷かあ」

「ああ。もしかしたら、フランが遊べる相手が増えるかもしれないぞ?」

「ふーん……。ロミオが居ればいいや」

私は今、フランちゃんの居る地下室で、フランちゃんを膝に乗せて会話を楽しんで先程の心の傷を癒している。



ここに来た名目は、フランちゃんへの状況説明だ。

イジメられたから来たなんて口が裂けても言えないもんね!!

「フランは、こーやってロミオに抱きつけるだけで幸せだよ?」

「だが……流石に私だけというのもの。もし、私が用事で居ない時にフランが痾癪を起こしたらどうする?」

「ロミオが居ない……? いや、いや! いや!!」

あ、これイケナイやつじゃ……。

「イヤああああああ!!」

ああまた始まった……。

フランちゃんが頭を抱えて叫ぶ。

だが、今回は起きたばかりだ。

すぐにでも宥めれば収まるだろう。

「大丈夫、大丈夫だ。私は居なくなったりしない」

「本当に? 本当に、居なくなったりしない?」

「ああ。私が言ってるのは、私が外に出ている時にフランが痾癪を起こしたら誰が止めるのかという話だ」

やはりすぐ落ち着いたのでゆっくり、次は勘違いさせないようにして話す。

フランちゃんは優しい子だからな。紅魔館の誰かが居なくなるということに敏感になっってしまっただけだろう。

「…… だから、いざと言う時にフランを止める人がいるの？」

「端的に言えばな」

「…… ロミオは、そっちの方がいい？」

「それはフランが決めることだ」

約500年生きていたと言っても、そのほとんどをこの地下室で過ごしていたのだ。

やはり、こういう子供っぽい所が目立つ。自分の意見に自信が持てないのだろう。

「…… 分かった。努力する」

「ああ。良い人が居たらフランに紹介してみよう。」

そう言っ、私は階段を登った。

---

ロミオが、友達を作ってみたらとフランに言ってきた。

よく良く考えれば、ロミオが居ない時のことを考えたことなかった。

さつきはそれを考えて発作が起きちゃったけど……。

確かに、ロミオが居ない時に狂ってしまったえば（正直、上の連中はどうでもいいのだが）、ロミオが困ることになる。

それはダメだ。なので、作ることにした。

…… だけどそれは後回しになりそう。

「揃ったわね」

私は、目の前に広がる曲者達を視界に入れた。

「酒持ってこーい!!」

妖怪の山の鬼の片割れ、伊吹萃香。

「ウフフフ……」

四季のフラワーマスター、風見幽花。

「あらあら」

寒気を操る妖怪、レティ・ホワイトロック。

「(こらこら、あまり騒ぐものじゃないですよ」

天狗の長、天魔。

それ以外には、下級や中級の妖怪。

中に少ないが上級の妖怪も何人か混ざっている。

戦争の準備は整った。

「……これは良い刺激になりそうね」

当分、妖怪への畏れのことは気にしなくて良さそうだ。

いよいよ吸血鬼軍団VS幻想郷が始まるわけだが……。

『お願いよロミオ。今回は、手を出さないでちょうだい』

レミリアに真剣にお願いされてしまったせいで、今回はお留守番だ。

フランちゃんの居る地下室で待機している。

外からは色んな音が聞こえてくる。

「ロミオ、ロミオ、ローミーオー♪」

ギユウギユウと凄い力で抱きついてくるフランちゃんを撫でながら、1人考える。

(……私ってそんなに頼りないかな!?)

## 王者、突入す（中2）

フランちゃんとしのの間遊んだ後、外の様子が気になったのでエントランスの窓から外を見てみた。

「ここを通すなー!!!」「死ぬ気で止めろ!!!死んだなら肉壁になれ!!!」「目を潰せ!!!不意打ち問答無用!!!」

「今だけ我らは高貴な吸血鬼ではない!!!今宵の我らは、獣同然のゴミクズだ!!!何をしてもいい!!!ただ、無駄死にだけはするなあ!!!あのお方に、勝利をおおおおおおお!!!」  
『おおおおお!!!』

え!?あの吸血鬼達がここまで必死に!?  
プライドも捨てる勢いなんて……。

これは戦況が怪しいぞ。

…… それより、満月だからか妙にソワソワするな。

落ち着かせるために、シャドーボクシングでもするか。

目を瞑って腕を構える。

シュツシュ!!

シユシユシユ!!

シユシユシユシユ!!!

シユシユシユシユシユシユガスツ!!!

「グヘエ!!」

.....  
ん?何か当たったかな?

---

それじゃあ、そろそろ私も行きましようか。

「紫様、お気を付けて.....」

「ええ、ここは頼むわよ。藍。」

「仰せのとおりに」

私はスキマを開けて敵の本丸に乗り込もうとした。

すると.....!?

予測していたようにスキマから腕が飛び出してきた。

「え!?!グヘエ!!」

ものの見事に顔面に当たり後ろに飛ばされた。

「紫様!？」

私はそのまま、無様に気を失った……。

「レミイ、なんで彼に頼らなかつたの?」

パチエが疑問をぶつけて来る。

当たり前の疑問だった。彼はそこに居るだけで全てに影響を与える超越者なのだ。

彼がいれば恐らく勝てる。

だが、私はそれをしなかつた。

「……これ以上、彼に頼るわけにはいかないからよ」

「……それは、なんでかしら?」

思えば最初から今まで、彼にはお世話になりっぱなしだった。

私としては、彼は目上の存在であり、もう一人の父親の様な物だ。

彼に言えば、何も言わずに協力してくれるだろう。

だが、それではいけない。

「彼に、貴方が居なくても私達はやっていけるって、そして」

——私達はこんなに強くなった、だから安心してって、伝えたいからよ。

それは、一人立ちする子供が親に今まで育ててくれたことへの感謝をするかの様な感情だった。

この戦争は、吸血鬼の力を見せつける他に、自分勝手なことだが、彼への今までの感謝の儀式なのだ。

ここまで私達を見守り、助けてくれた彼への恩返し。

それは今、ここで果たす。

「だから、負けるわけにはいかないの」

「…… ほほお、吸血鬼とは義理堅いのですねえ」

自室だと言うのにも関わらず、後ろから声が聞こえる。

…… そろそろ来る頃合なのは能力で分かっていた。

「パチエ、貴方は他を当たりなさい」

「わかったわ」

瞬間移動をしたパチエを見送り後ろを振り返る。

「初めまして。幻想郷に居る天狗の長をしている、烏天狗の『天魔』と言うものです」

「紅魔館党首、レミリア・スカーレットよ」

6枚の翼を携えた、顔の半分を布で隠した烏と自己紹介を済ませた。

「自慢ではないのですが、恐らく私は幻想郷の中で現在最速でしょう…… 追いつけま



すかな？」

布で隠れているのにも関わらず分かるほど、嫌味つたらしい笑顔を向ける烏。わかり易い挑発だ。しかし乗ることにした。

「良いだろう。純血の吸血鬼との差を、幻想郷なんぞ狭い世界だということを、その身に思い知らせてやろう!!」

私にとって、これはただの前哨戦。

さあ、この勝利は、彼に捧げようぞ。

『純血の吸血鬼』レミリア・スカーレットVS『幻想郷最速』天魔

開幕

---

レミイに言われた後、私は図書館に戻っていた。

「遅かったじゃないかー。待ち侘びたぞー」

「ば、パチュリー様あ……」

先客がいた。

小さな少女の姿だが、酒をガブ呑みする奇妙な妖怪。

頭に小さな角が生えている所から見ると、鬼かしら？

それに怯えるこあ…… はいいかしらね。

「あなた…… 鬼ね」

「おお!?! あんたあたし達のこと知ってるのか」

「ええ、有名なもの」

「それじゃあ、あたし達の強さも知ってるよねえ?」

「ええ。まず普通の戦いじゃ負けるわね」

「じゃあ…… どうするんだい?」

「ゲームをしましょう」

「ゲームう?」

私はほうけている鬼の対面に座り、トランプを出した。

「ポーカーって知ってるかしら?」

「あぁー前にやったことあるねえ」

「そう、それならルール説明はいらないわね」

「へん、ゲームなんてつままない」

「あら? 鬼が勝負から逃げるのかしら?」

「……上等じゃないか」

真剣な目つきになった鬼にカードを配る。

「私の名前はパチエリー・ノーレッジよ。貴方は？」

「伊吹萃香だ」

「それじゃあ、スタートよ。こあが見てちょうだい」

「ヴェエ!?!」

『七曜の魔女』パチエリー・ノーレッジVS『酒吞童子』伊吹萃香

開幕

シャドーボクシングを続けていると、壁が壊されて血塗れの女性が入ってきた。

「あらあ、奇遇ねえ。こんな所に居るなんて」

「誰だ？」

「風見幽香。近所で花畑を世話しているわ」

「私はロミオ・スカーレット。しがない吸血鬼だ」

「ご親切にどうも。だけど、あなたは『しがない』なんて言っちゃいけないわよ」

なんでだ。本当にしがないのに。

そうツツコむ暇もなく会話が再開される。

「突然で悪いけれど、戦いましょう」

「断る」

「ダメ♪」

なんて横暴だろうか。

この人は結婚できそうにないな……。俺みたいにな!!

やべえ、泣きそう。

『しがない吸血鬼』ロミオ・スカーレットVS『四季のフラワーマスター』風見幽香

開幕

## 王者、突入す（後）

「グングニル!!」

手始めに、魔力の槍を鳥にぶつける。

「おやおや、部屋が壊れても良いんですか?」

だが鳥は扇子で仰ぐだけでグングニルをへし折った。

あれは……風の刃か?

風を纏めているのか。

「気づきましたか。天狗の長たるもの、これくらいできなくてはやっていけませんからねえ」

扇子を振るうと、まさに風を斬るような音がする。

見る限り重さも無いようだ。

「では、次はこちらから!!」

目視もできない速度で駆けてくる鳥。

だが私は、繰り出された蹴りを《視て》回避する。

「なっ!?!」

「視えているぞ」

カラクリは単純、能力を使っただけだ。

運命、つまりは未来を視てそれに沿って攻撃を避けているだけだ。

もちろん、それは攻撃だけではなく回避も視える。

その証拠に私には、私から距離を取ろうとしている鳥の姿が能力越しにはつきり視えた。

「そら!!」「なに!?グハア!!」

距離を取ろうとして、体を浮かせた鳥の脇腹に蹴りを入れる。

吹っ飛ぶが受け身を取って体制を整える鳥。

そこに追い打ちを掛ける。

「!?!」

鳥は驚いて右に避ける。

ここまでも『全てが運命の通り』だ。

もう1度床を蹴り、方向転換する。

「視えていると言っているだろう」

「ツ!?!」

今度は鳥の腹に蹴りを入れる。

腕で防いで居るが、足からは小枝を踏み折ったような感触が伝わる。真上に蹴りあげる様にしたから鳥は天井に打ち上げられ、落ちてくる……ことはなく、羽で距離を取り、息を整える。

「はあ…… はあ……」

「どうした？先程の嫌味つたらしい笑みはどこに置いて来たんだ？」

クツクツとお返しにイラつくであろう笑みを浮かべる。

「あまり、図に乗るなよ蝙蝠如きがあ……！！」

素が出たのか鳥の言葉使いが荒くなっていく。

「あら、薄汚い鳥に言われちゃ終わりね」

「図に乗るなど、言っているだろうがああああああ！！！！」

貶したのが余程気に食わなかったのか、逆上して突っ込んでくる。

「はあ、つまらないわね」

私も鳥に向かって拳を振るう。

だが、油断して未来を視ていなかった。

鳥は、体を捻って拳を躲し、顔面に蹴りを入れてきた。

幻想郷最速を名乗っているだけあって、蹴りも速度が速く鋭かった。

そのまま飛ばされ、壁にぶつかる。

「ふう…… やつと一撃与えられました」

先程とは打って変わって冷静な声音の鳥。

口を切ったのか血の味がする。

それを吐き出し、油断を断ち切る。

再び構えたその時、鳥は動いた。

「ああ、すいませんね。実は私は時間稼ぎでしてね。貴方の本来の相手は、あちらです」

鳥の目線の先には、日傘を指し洋服を着た、冗談かと思う程の妖力を滾らせた女。

それに付き従う様に立っている九つの尾を持つ女の2匹の妖怪が居た。

片方は知っている。確か妖怪の賢者と呼ばれていた、相手陣営の大将首の筈だ。

「遅れてしまつてごめんなさいね。私は八雲 紫。

こっちの九尾は私の使い魔、藍よ」

九尾の女は軽く会釈する。

「相手が突然変わつて不服かもしれませんが、不精ながら、お相手するわ」

「結構だ。せっかく相手方の大将が出てきたのだ。それに応えないと紅魔館に泥を塗る

ことになる。

「御託はいい、さっさとけりを付けよう。」

「全くもつてそうですわね。では、行きますよ」



女は動かさずおかしな切れ目を空間に生み出した。  
私は気にせず能力を展開して突っ込んでいった。

レミリア・スカーレットVS天魔  
引き分け

レミリア・スカーレットVS『妖怪の賢者』八雲 紫  
開幕

---

「ほれ、ロイヤルストレートフラッシュユだ」

「ま、また？またなの……!？」

パチュリーは現在、鬼に完敗している状態だった。

それも40戦40敗。

見事なまでの完敗である。

「なぜ、( )まで……!？」

「私の能力さ」

「能力ですって!?!」

パチュリーははつとした様な表情で萃香を見つめる。

「私の能力は『密度を操る程度の能力』。それを使って、都合のいい札を『萃めた』のさ」  
「そ、そんなのイカサマじゃない!!」

立ち上がり怒鳴るパチュリー。

無理が祟ったのかゲホゲホと咳き込む。

持病の喘息だった。

「あんただって、使ってたじゃないか」

「なっ!?!」

してやったりと言う様な顔をする萃香。

「わからないと思っただかい?」

カードの絵をあんたの魔法……だっけ? それで変えて不自然ではないが勝てそうな役に変えてたじゃないか。

相手が出した物を疑うのは賭け事の基本さね」

ペラペラとネタばらしをする萃香。

パチュリーは焦っていた。

確か文献によると鬼は……。

「あんた、あたし達のことを知っているなら、もちろん解っていた筈だろう？」

鬼は、嘘が大嫌いだってね」

そう、鬼は嘘が嫌いだ。

鬼に嘘を吐いた人間は、例外なく酷い目に遭ってきた。

「だがこれは賭け事で勝負じゃない。だからあたしも見逃して、イカサマ代わりに能力をつかったのさ」

「そ…… そんなの理不尽よ!!」

そう。理不尽なのだ。

萃香の能力は、使い方や考え方によつて応用の幅がこれでもかと広がるタイプの能力だった。

怒鳴るパチュリーを前に、鬼は面白そうに嗤う。

「知らなかったのかい？ 鬼は、得てして理不尽な物さね」

鬼は理不尽。

幻想郷に住む人間や、妖怪の山の天狗やその他の妖怪は、思い知るほど解っていることだった。

パチュリーもそれを聞いて、諦めたように椅子に座り直した。

「さて、賭け事は私の勝ちだが、命を賭ける様な物でもなかったからね。今回は見逃してあげるよ」

勝ったのが嬉しいのかニヤニヤしながらパチュリーにそう言う。

そして、また口を開いた。

「その代わり、あの扉の奥からずーっと殺気を向けている奴の所に連れて行ってくれな  
いかい？」

鬼が指さした場所は、地下室への入口だった。

パチュリー・ノーレッジVS伊吹萃香

勝者、伊吹萃香

「行くわよ」

その言葉と共に、女性の姿が掻き消える。

同時に、私の体から抉られた様な音が聞こえた。

同時に、地面に血しぶきが舞う。

私は一瞬でそれが自分のものだど理解した。

……いや強すぎい!!

こんなの、私に当てるような物じゃ無いと思うんだよね!!!  
「あらか？確かに攻撃は当てたはずよ？それにちやーんと手応えもあつたわ。血もついてるし。」

なのに、どうして傷一つ無いのかしら？」

いつのまにか後ろに……恐らくだが目視できない速度で私を手を持つ傘で抉りとりながら移動したのであろう女性が、手に持つ傘に付いた血を振り払いながら不思議そうに呟く。

「吸血鬼の回復力は確かに目を見張る物はあるけど、あの一瞬じゃ到底治せる様な傷じゃ無かったわ」

そう呟き少し考える素振りを見せて、すぐに笑顔になってこちらを見てくる女性。

「吸血鬼の回復力は実力があればあるほど強いって聞いたわ。もしあの一瞬で直る程の回復力の持ち主だとすると、やっぱり貴方は強いことになるわねえ」

おい、誰だそれを広めた馬鹿は。

誤解ですー。ただの体質で決まるんですー。

「誤解だ。現に私は手も足も出せなかつたじゃないか」

「痛がる素振りも無いの？面白いことを言うわね」

クスクスと蠱惑的に笑うな。

挟られるのも直るのも速すぎて痛みが追いつかなかっただけです。

「それにしても、ドンドン『重い』空気になっていくわねえ。息苦しいからやめてくれな  
いかしら?」

重苦しいのはこつちだ。

突如現れた馬鹿強い女性を相手に生き残る術を見出さなければいけないのだから。

これじゃフランちゃんに友達を作るといふ約束が守れない。

ここは逃げてでも生き残らなければ。

……あの速度からは逃げられないだろうが。

「あら、また重くなったわね。これが貴方の能力なのかしら?」

空気を重くするとかそんなの真剣な話以外に使い道無いだろう。

ああ逃げたい。

「さあ、続きをしましょうか」

うわあ、逃げたい。

特に今女性が浮かべている野獣の様な笑顔(?)には近づきたくない。

「もう私はお腹いっぱいなのだがね……」

「冗談も程々にしないと……面白いのは最初だけよ?」

急に真顔にならないでください。

能面も顔を青くする程の冷たい真顔だ。

そして、また体を何かを通り過ぎる音がする。

しかし今回は1度だけではなく、何度も聞こえる。

特に痛くは無いので立ち尽くす。

辛うじて見えるのは緑色の残像だけだ。

「うちが開かないわね。もう一気に吹っ飛ばしましょう」

すると女性は動きを止めて、傘を前に突き出し魔力か妖力か……高くなり過ぎて

判別がつかなくなった物を傘の先端に集める。

これは本気でマズイ。確実に紅魔館が崩れる。

本能的に察した。

私は逃げた。あれを打ち出される前に別の物に興味を向けなければ。

彼女は恐らく生粋のサディストだ。

逃げるネズミは追いかけて踏みにじるタイプだろう。

「あらあ？ 追いかけてっ？ それともかくれんぼかしら？」

どっちも大好きよお？ 相手を追い詰めるのは大好きなもの」

やはり掛かった。

傘を下ろして笑顔でこちらに向かってくる女性。

隠れて気配を消し不意打ちでもするしかないか……。

私はスニークには自信がある。

百年程前にフランとかくれんぼをした時は、隣にいるのに探されるといふ虐めにも似たことをされた。

どんだけ影薄いんだよ。

しかし今はこれに賭ける他ない。

息を整え、空間に同調するように脱力する。

「どこへ逃げてても無駄…… あら？ あら？ 気配が完全に消えた……？」

いや通用するのかよ!!

「生きていれば少なからず気配はあるのに……。 本当に飽きさせないわねえ」

遠まわしに死体みたいだなと言われたんだが。

「それじゃあやつぱり纏めて吹き飛ばすしか無いわね♪」

分かってやってるだろ!!

私が嫌がるの分かってやってやがるよこの女性!!

「分かった。分かったから、それは止めてくれ」

「フフ♪ やつと出てきたのね♪」



ルンルンとでも言いた気の上機嫌な女性。

くそ……可愛いなおい。

「さあ、改めて行くわよ!!」

ゴウツという音と地面が凹む音と共に私の体に衝撃が叩き込まれ、同時に獰猛な笑みを浮かべる緑髪の女性が目に入る。

私の体はその一撃に耐えきれずに、女性の腕が貫通する。

その衝撃波で、窓が割れ後ろの壁には穴が空いた。

「はあ、呆気ないのね」

「勝手に殺すんじゃない」

「!?!」

すごく驚いている。そうだろうね。

体を貫かれたのに平然と話し掛けて来るんだもんね。

「だけど……ねえ?」

体を貫かれるくらいはいつもフランちゃんは何度もやってくれるから。

私の中では今更感がある。

「さて、そろそろ終わりにしよう」

まああれだ。

全力で殴って……効かないだろうけど、全力で殴って降参を申し出れば良いか。

私は、腕を引き絞り、出来る限りの力で殴り抜いた。

すると、女性は腕を引き抜き、青白い顔で後ろに下がった。

……あれ?なんで?

「はあ……はあ……あ、ありえない。そんな、この私が……!」

え?え?なんで?どうしたの?

……もしかして、怖かったのか?

ああ、だから『ありえない』なのか。

そうだよ。男が女性を殴るとか『ありえない』よね。

男が全力で殴ってきたらそりゃ怖いよ。

「済まない。大人気無かった。怖かったろう?大丈夫か?」

できるだけ優しく声をかける。

「大人気……!?!怖い……!?!……ふふ、フッフ、アツハツハツハツハ!!!!」

急に笑い出したんだけど!?

「……けよ」

え?なんだって?

「だから、私の負けよ。ほんつつつとうに久々の『完敗』ね」

……はあ？

ロミオ・スカーレットVS風見幽香

勝者、ロミオ・スカーレット

「はあ……はあ……」

「あらあら？もうおしまい？」

何故だ……。先程からまるで能力が使えない。

そのせいでこの女の攻撃を読めずに、一方的に捌られてしまった。

「ウッフ、不思議でしょう？」

貴方の能力……。そうねえ、『運命を操る程度の能力』とでもしましょう。

運命を操る程度の能力は、封じさせて貰ったわ」

「どう、いうこと、だ……。!!」

「私の能力は『境界を操る程度の能力』。

説明は難しいけれど、なんでも出来ると思ってくれて良いわ」

そのなんでも出来る能力で、私の能力を封じたのか……。

「親切な私が教えてあげるわ。貴方の負けた要因は、二つよ」

女は倒れ伏している私に指を立てて突き出す。

「一つは、能力に頼りすぎていたという点」

言われてみれば確かにそうだ。

未来が見えるからと言って鷹を括った拳句がこうだ。

現に能力を取られただけでポロ雑巾のようにされてしまった。

「二つ目は…… 戦いではなく別の何かしか見ていなかったからよ」

そうか、そういうことか。

私は、彼のことしか考えていなかった。

彼への恩返ししか頭に無いせいで、戦いから目が逸れてしまっていた……。

だが、それで、彼のことを想っていたから負けたなら……。

それは、それで…… なんだ、か…… とても、うれし……。

私の意識は、そこで途切れた。

## 【裏話】襲撃者の心境

最初に浮かんだ感想は、凄まじいということだった。

別に相手は自分に向き合ってるわけでも、意識しているわけでもない。壁を砕いて出てきた私を、こいつはただただ客観的な目で見ていた。

だが、それだけで押しつぶされそうな威厳の様なものを感じた。

「あらあ、奇遇ねえ。こんな所に居るなんて」

こちらに意識を向けたくて、とりあえず声をかけた。

『誰だ?』

彼が行ったのは、声を発して、しつかりとこちらに顔を向けただけだ。

だがそれだけで、こいつは私に衝撃を与えた。

強い。私に迫るか、追い越さんばかりの覇気を感じる。

体に雷が落ちた様だった。

体が歓喜で震える。

喜びで視界が開ける。

本能が、こいつとの戦闘を望んでいる。

「風見幽香。近所で花畑を世話しているわ」

本当は喋る時間でさえも勿体ないのだけど、聞かれたものには答えないとならない。答える義理は別に無いのだけど、私を悦ばせてくれたお礼の様な物にしておく。

『私はロミオ・スカーレット。しがない吸血鬼だ』

ロミオ……ロミオ・スカーレット。

私は頭でこいつが名乗った名を反復した。

ああ、だんだんとこの名が愛おしくなっていく。

このまま溺れてしまいたいそうさ。

だが、少し気に食わない部分もあった。

「ご親切にどうも。だけど、あなたは『しがない』なんて言っちゃダメよ」

謙虚も行き過ぎれば嫌味になる。

こいつがしがないなんて言ってしまったら、そこら辺の上級妖怪なんぞ存在すら許されないことになってしまうでしょう？

ああしかし、そろそろ我慢の限界だ。

ヨダレでも出てしまいそうな程だ。

「突然で悪いけれど、戦いましょう」

『断る』

「ダメ♪」

これ以上我慢しろなんて酷な事を言うものだ。

ああ、ダメだ。

そんなことを考えている間に、もう、抑えが効かない所まで来てしまった。

「行くわよ」

私は、軽く地面を蹴ってこいつ……『ロミオ』に手に持つ傘を突き立てた。

だが、ロミオは動きもせず、攻撃を受けた。

その視線は、未だ私が立っていた場所に向けられていた。

……まさか、目で追えなかった？

そんな筈はない。ロミオは、私を押し潰す程の覇気を持った強者の筈だろう。

もし、それが覇気だけの見掛け倒しなら、今の一撃で弾け飛んでいる筈だ。

……いや、筈だった。

ロミオは別に気にした様子もなく、変わらずその場に佇んでいた。

「あら？ 確かに攻撃は当たってはすよ？ それにちやーんと手応えもあったわ。血もついでるし。」

なのに、どうして傷一つ無いのかしら？」

傘に付いた血を振り払いながら、考える。

私は、ちゃんと傘がロミオの体を挟りとる瞬間を目撃した。

「吸血鬼の回復力に確かに目を見張る物はあったけど、あの一瞬じゃ到底治せるような傷じゃ無かったわ」

そう、そうなのよ。

吸血鬼のしぶとさは外で玩具にした連中から体感している。

あれか？再生力に長けていただけだったのか？

…… そうですね、あの玩具連中から聞いた話があった。

「吸血鬼の回復力は実力があればあるほど強いって聞いたわ。もしあの一瞬で治る程の回復力の持ち主だとすると、やっぱり貴方は強いことになるわねえ」

そうだった。つい先程この話を聞いたばかりだった。

…… 先程の自分を戒めなければならぬ様だ。

ここまでの強者を前にして『まさか実は弱いのか』と疑ってしまった。

ああ恥ずかしい。私の目はいつから節穴になっていたのか。

自分への恥ずかしさで胸がいつぱいになると同時に、嬉しさがまた溢れてきた。

瞬き一つの瞬間に体を別ける程の傷を治す程の再生力。つまりはそれに比例する程の力をロミオは持っているわけだ。

ああ!!なんて素晴らしいのだろうか!!



今からそんな化物とも言える物を相手するのか…… 私は!!

ああ、ロミオ。『貴方』はどこまで私を悦ばせれば気が済むのかしら?

『誤解だ。現に私は手も足も出なかつたじゃないか』

「痛がる素振りも無いのに?面白いことを言うわね」

私でも腰部分を取られたら顔をしかめるくらいはするだろうに。

痛くも痒くも無い顔をしているロミオがおかしいのよ。

それとは別に、気になることがある。

「それにしても、ドンドン重い空気になっていくわねえ。息苦しいからやめてくれないかしら?」

別に苦しくはないのだが冗談交じりにそう言う。

先程から、空気が重さを持ったように私の体を締め付けるのだ。

そう考えていると、また3倍ほど重くなった。

腕を上げるのに少し力が入るほどだ。

「あら、また重くなったわね。それが貴方の能力なのかしら?」

幻想郷風によえば『空気を操る程度の能力』とかかしら?

『彼』に似合つたトンデモ能力だこと。

…… おっと、つつい楽しいすぎて話し込んでしまった。

「さあ、続きをしましょう」

そろそろ再開しましょう。

貴方と私だけの武闘会を。

『もう私はお腹いっぱいなのだがね……』

「冗談も程々にしないと……面白いのは最初だけよ？」

彼のつまらない冗談を切り捨て、今度は本気で殺しにかかる。

みじん切にせんばかりの乱撃でロミオをズタズタにする。

だが、やはり全てが再生する。

腕を確実に切り落としても別段変化は無く、頭を砕いても表情が変わらず……。

よくよく見ると、裂いた所から瞬時に治り、傘が通過した頃には傷一つ無くなっている。

これでは裂いているとは言わない。『通過』しているだけになっている。

恐らくロミオを物理で殺すことは無理に近いだろう。

そうなれば……。魔力で塵一つ残さず吹き飛ばしましょう。

傘を構え魔力を集中させていると、踵を返して逃げてしまった。

なるほど、館が壊れないように配慮したのだろう。

まあ、追いかけてこも苦手では無いから付き合っただけでしょう。

彼の覇気を辿って近づいて居ると、途端に気配が殺されてしまった。

息を潜めるだけでどうも存在を隠せる物なのか。

ロミオ、貴方は本当に私を飽きさせない。

だけど、探すのも飽きたわ。

脅しで傘を構えると潔く出てきた。

『分かった。分かったからそれは止めてくれ』

「フフ♪やつと出てきたのね♪」

思わずに上機嫌な笑みが浮かんでくる。

「さあ、改めて行くわよ!!」

床を蹴り、彼の心臓にマトを定める。

吸血鬼は心臓に杭を打たれると絶命するらしい。

ならば、私の腕を杭にしましょう。

狙い通りロミオの体を腕が貫いた。

これで私の勝ちね。

贅沢言うなら、もつと戦いたかったわあ……………。

「はあ。呆気ないのね」

思わずため息が出る。

仕方ないわよね。私の方が強かったのだから。

『勝手に殺すんじゃない』

「!？」

特に変化もなく私に声をかけるロミオ。

なんで……？ 心臓は再生しないように腕は貫いたままなのに!？」

『さて、そろそろ終わりにしよう』

彼がそう言った瞬間、体の芯まで凍るような殺気が向けられた。

動こうとするも金縛りにでも遭ったように動かない。

彼の腕が引き絞られ、拳が振るわれる。

蚊が止まりそうなほど遅い拳。

普段なら鼻で笑うような一撃。

だがそこには、明確な『死』が映し出されていた。

ほとんど反射で腕を引き抜き、後ろに跳躍する。

「はあ…… はあ…… あ、ありえない。そんな、この私が……!？」

私は、最後に感じたのがいつか分からなくなっていた感情を思い出していた。

それは『恐怖』。

体の震えが止まらない。

最初とは違う、恐怖による震えだった。

私の戦意は、たった1発の拳で削ぎ落とされていった。

『済まない。大人気なかった。怖かったらろう？大丈夫か？』

子供をあやす様に優しい声で語りかけてくるロミオ。

「大人気……!?!怖い……!?!」

そんな……そんな馬鹿な……

『彼は、ロミオは、この戦いを子供の世話とでも思っていたのか!?!』

思えば、1度も手を出しては来なかった。

受けるばかりで、私のしたいようにさせている節があった。

そうか、そうだったのか。

彼は、私の手が届くような次元には存在していなかったわけか。

「ふふ、フッフ、アツハツハツハツハツ!!!!……負けよ」

彼は少し首を傾げている。聞こえなかったのか。

「だから、私の負けよ。ほんつつつとうに久々の『完敗』ね」

私は、負けたのにも関わらず、少しほっとしていた。目標ができたからだ。

もう、目標に出来るものなんて無いと思っていた。

それが、急に出てきた。

とても、とても嬉しかった。  
私はずっと、もっと上を目指せる。

## 戦争の結末

「で、何故くつつくののだ？」

「フフフ、良いじゃないそんなこと♪」

レミリアの所に向かおうとしたのだが、何故かこの女性……風見幽香さんだっけ？

幽香さんに引っ付かれてしまった。

色んな場所が当たって……。凄くスベスベな手だなあ。

「ん？どうかしたのかしら？」

おっと、見すぎた。

「すまない。見蕩れていた」

「え!?!……フ、フフ、これは手強いわね」

正直な感想を言えば女性は恥ずかしがる。

まさかこんな所で500年ほど前の友人の教えが役立つとは。

元気にしてるかなあ……。まだルーマニアに引きこもってるのかな？あの髭ズラ王は。

さてさて、照れてくれたお陰か幽香さんは離れてくれた。

レミリアに壁とガラスが壊れたことを伝えなければ。

ドアの前まで来ると、中から話し声が聞こえた。

「え？ 貴方がトツプなの!?!」

「どういう意味だそれは……!!」

「あの男の吸血鬼じゃなくて!?!」 「それを言われると言い返せんな……」

レミリアの声と違う声が聞こえる。

誰だろう？ レミリアの友人かな？

その前にノック。コンコン。

「入るぞ」

「あ、はいはい」

「え……？ この感じ…… ま、まさか!?!」

ガチャツとな。

中には向き合って話すレミリアと、紫色の服を着た女性がいた。

…… つてレミリア!?! その傷どしたの!?!

「レミリア、その傷は……？ 」

「お恥ずかしいことに、打ちのめされたわ」



「そうか……。この女性にか？」

「え!? あ……!!」

うわーマジかー。

スゲーな。レミリア倒すとかどんな化物なんだろうか。

……にしても、この子も人見知りかな？

「緊張しなくてもいい。レミリアに勝ったんだ、誇れることだぞ？」

「い、いえ。ありがとうございます」

おお、確か扇子だっけ？初めて見た。

口を隠す仕草がなんとも似合っている。上品だなあ。

「私は八雲 紫。幻想郷の管理人の様な者です」

「私はロミオ・スカーレット。我ら紅魔館、君を歓迎しようじゃないか」

腕を広げて受け身の構え。

ほーら怖くない。

「……ねえ、本当に貴方がこのトップなの？」

「最近自信が無くなってきたんだ。あまり突っ込まないでくれ」

ん？何かヒソヒソ話しているな。気になる。

それはいいとして、話を聞くとどうやら私達紅魔館陣営は大將陥落で敗北扱いだそう

だ。

あーらら。負けちゃったかあ。

「ところで……ロミオさん」

「なんだ？」

「後ろの緑髪はそのー……私の友人で」

「ああ、幽香さんか。呼ばれているぞ？」

「ええ。大丈夫よ。「だいじよばないわ」大丈夫よお？」

激しいアイコンタクトの末、幽香さんは紫さんと一緒に帰ることになったらしい。

「紅魔館はこれから、無期限の封印となります。ですが、恐らくそこまで長くないと思われますので、気長にお持ちください」

「大丈夫だ。解くことがあれば、伝えに来てくれ。」

「私のセリフを取らないで」

おっとすまない。

……  
そういえば。

「これではフランの友人作りが遅れてしまうな」

まあそこまで長くないらしいし。大丈夫かな？

「ロミオ……」

幽香さんが呼んでくる。

…… 呼び方には突っ込まないぞ。

「どうした？」

「また、会いましょうね？」

「良いとも」

いやーこれはモテ期来ちやっただかな？

こんな美人に誘われるとか嬉しいなあ。

笑顔は怖いが……。

## 紅魔館、始動

あれから10年……くらいだと思う。  
体感だから自信はない。

この間紅魔館の皆も、本当に何も変化の無い日々とうんざりしていた。  
長い時間生きている吸血鬼なんかの生き物は、案外変化の無い日々  
に強い筈なんだが……。

どうもこの人達は退屈で堪らないらしい。

自殺者が出ないか心配にもなった。

長い時間を生きている吸血鬼の一番の死因は退屈から来る自殺なのだ。

かくいう私もほんの300年前に1度自殺した。再生したけど。

だが、自殺する吸血鬼としない吸血鬼では明確な違いがある。

やること、やりたいことがあるか無いか。

誰かと一緒に過ごしたり、大切な人ができたり、使命なんかができたりすると生きる活力になるってものだ。

つまり自殺する吸血鬼は独り身なのだ。

非リアとリア充の差である。

だからこうやってまだ生きている私は寂しい奴なんかじゃないと信じたい。信じさせてくれ。……ダメ？やっぱ結婚した方が良いのかな。

でもなー、私は生まれてからモテたことがないのだ。

女の子や女性に近づくといつも倒れてしまう。

無論、女性の方がだ。

その後はだいたい目が虚ろになったり、なにかに怯えてる様にナニカを呟いている。

その大体が『全て貴方に捧げます』的なことを言っている。

神に祈っているのだと私は思っている。

……そんなに私は怖いのか。

吸血鬼なのに神にすぎる程に私は怖いか。

その女性達は次会った時から顔を真っ赤にしながらお辞儀しだす。

私がかか喋る度に震えたり、ビクついたりする。

こんな独り身歴700年という他とは別格に寂しい奴な私に興味を示す人が居るか  
どうか……。

幽香さんは……バトルジャンキーでしょ？あれはそういうお誘いではないと思  
うんだ。

最近、レミリアとかフランちゃんでもいいかなーなんて危ない方向に思考が傾いている。

とまあ、ご覧の通りこんなしょうもない事を永遠と考えている始末だ。

これで自室に寝つ転がった状態だと言えど程退屈か分かってもらえるだろうか。

三日前からずっとこの状態だ。

フランちゃんの所に行っても良いのだけど、嫌な予感がする。

とんでもなく嫌な予感がするので、少し今は置いておくことにする。

ああ、封印っていつ解くのだろうか……。

バアン!!と扉が開かれる。

昨日までの光の無い目とは真逆に、目が輝いているレミリアが居た。

「封印、解かれるらしいわよ!!」

寝転んでる場合じゃねえ!!!

私は即座に起き上がって、早く早くと急かすレミリアの後ろを着いて行つた。

「さつきレミリアに話しましたが、今日封印を解くことになりました」

何故か深々とお辞儀をしてくる紫さん。

あれか？封印が長くなったのを気にしてらっしやる？

そんな気にしなくても良いのに。

「構わない。話を続けてくれ」

私が話を促すと、紫さんが話し始める。

「紅魔館の皆さんには、『異変』を起こしてもらいます」

異変？なんだそれは。

「異変とは、ここ幻想郷に暮らす人間達の畏れの衰退を防ぐための、所謂行事です。妖怪の力を、人間に害が無い程度に見せつけ、人間達が妖怪の存在を忘れないようにするための物です」

なるほど。いやはや、上手いシステムを作ったものだ。

「今回の異変は、というより、幻想郷で初めての異変は紅魔館に任せたいと思って来た次第です」

え、初めてなんだ。

つまり紅魔館が起こした異変がこれからの異変の目安になるのか。

少し緊張するな。

「ふふん。そんな事なら任せなさい。だけど、それって誰が解決するの？」

確かに。レミリアに勝てる人間となるとかなり限られるが……。

「そこは大丈夫です。『博麗の巫女』が、異変を解決する手立てになっていますから」

博麗の巫女とは、幻想郷を覆い隠す博麗大結界を代々守護し、妖怪の退治も行う人間の代表の様な物らしい。

そんなのが居るのか。

「でも、もしその巫女が解決できなければ……？」

「当然、異変は続けてもらいます」

なるほど。博麗の巫女に勝てれば、幻想郷を少し自分の自由に出来るという訳か。

「それなら、この私達紅魔館が、その巫女を打ち倒して見せるわ!!」

おお、凄いやる気だなレミリア。

「ウフフ、ではまた」

紫さんは、もう1度私に深い礼をして裂け目に入っていった。

「で？レミリアはどんな異変を起こすのだ？」

レミリアに聞いてみると、悪い笑顔で顔を向けてきた。

「ねえ、太陽つて邪魔じゃない？」

急にどうした。

……あ、もしかして

「なんだ、太陽を落とすのか？」

「違うわよ!!まさか、貴方……!!やらないわよね!?やめなさいよ!!」



なんでそんなに怒る。

太陽を落とすとかできるわけ無いだろう。

レミリアじゃあるまいし。

「そうじゃなくて、空を霧で隠すのよ。私の好きな血の色をした霧で!!」  
なるほど。そういうことか。

「誰が霧を生み出すのだ?」

「パチエに頼みましょう」

あの子喘息で倒れてるんだけど。

無茶を言うな。レミリアは。

---

「むう、来ない」

最近ロミオが地下室に来ない。

最後に来たのは7日前。

寝た回数を数えただけだから本当にそうとは限らないけど。

「次来たら、襲ってやろうと思ったのに」

ガオーってね。寝てる時にでも……。

ウフフ、ウフフフフフ。

「まあいいや。待つてれば来るよね」

その時は、思いつきりロミオと遊ぶの。

楽しみだなあ、楽しみだなあ♪

## 紅霧異変：巫女、発進

「異変？」

「ええ、異変よ」

手元に置いてあったお茶を啜る。

今、私の目の前に居るのは博麗霊夢。

歴代博麗の中でも最高の資質と才能を持った私の最高傑作であり、私の家族の1人。

本人は嫌みたいだが、家族なのよ。

「…… そういえばつい最近、紅い霧で太陽が隠れて体調を崩す人間が続出しているから、元を断つて欲しいって依頼があったわね…… でも霧なんて見えないわよ？」

「まだ出てきたばかりみたいだから、ここまでは来てないのね」

「このお茶美味しいわね。」

「貢物が妖怪退治の依頼のお礼かしら？」

「なんで私がわざわざそんな物の為に……」

「この霧で結構犠牲者が出てるのよ？野菜も枯れて来てるし、人も倒れている。しかも大勢ね」

「それが？私は対価がなければ動かないのよー」

「はあ、貴女って本当に思考放棄が激しいわねえ」

「…… 何よ。馬鹿だつて言いたいなの？」

あ、霊夢が膨れている。可愛い。

イジリ過ぎたわね。少し拗ねてしまったみたい。

「そうじゃなくて、考えてみなさい」

「…… 何をよ」

興味を示したわね。

よしよし。こうなればあと一押しね。

「大勢が困っているってことは、貴女が動けば大勢が助かるわよね？」

「まあそうね。私、強いもん」

「つまり救ったぶん感謝されるわよね？」

「受けるわ」

ええ!?!一瞬で理解した!?!さっきまでのダラけた頭の回転の遅さはなんだったの!?!

まあいいわ。これで全ての準備が整ったわね。

霊夢が出れば異変はすぐにも解決するとは思うけど……。

アレが出てきたりしたら……。

『アレ』とは勿論、ロミオ・スカーレットのこと。

霊夢はおろか、私ですら勝てるかわからない化け物。

いや、本来負ける筈が無いのだ。

私の能力はそういう能力で、勝つのが当たり前の能力。

上には上が居るが、少なくとも幻想郷には霊夢以外に私に勝てる相手はそうそういない筈。

まあそれは霊夢の能力が規格外なだけなのだけれど………。

だがアレは、初見で2度も私の能力を見破っている。

1度目はバレただけだったが、2度目は手痛いカウンターを食らってしまったている。

私の能力だって全能ではない。全能に近いだけだ。

咄嗟のことには反応しきれないし、予想外のことには遭えば動揺もする。

私にとっての『予想外のこと』とは、今はアレである。

だが、霊夢の能力なら勝てないことはないだろう。

あれは想像力と応用力で使い勝手が激変するタイプの能力だ。

鬼の萃香の能力と似ている部分もある。

だからこそ、その爆発力は決して油断できない。

アレが出てこないことを祈る他無いが、今回は多分出てこないだろうと私は踏んでい

る。

アレも馬鹿ではない。むしろ逆だろう。

上手くこの異変が解決されるように動いてくれるだろうという、自分でもわからない謎の信頼があるから。

アレの『雰囲気』のせいだろうか。

ともかく、霊夢には頑張ってもらいたい。

初めての異変。何事もスタートが大事なのだから。

「……クシユン!!」

あれ、急にくしやみが。

誰かが私の噂でもしているのだろうか。

もしそうなら綺麗な美人さんだと嬉しいです。

「ロミオ様、大丈夫でしょうか!？」

咲夜ちゃんが心配してくれた。

ありがとね。でも大丈夫だよ。

「ああ、気にしないでいい。誰かが噂しているんだろう」

「そ、そうでごさいますか……。出過ぎたマネをどうかお許しください」

え、なんで急に謝られたの私。

なんだろう。この子、私のこと上に見すぎている節がある。

もつと……。なんだろうな……。相談相手とでも思ってくれたらいいのに。

「良い。咲夜も連日の仕事で疲れているだろう。もう下がっても良い」

咲夜ちゃん、最近疲れた顔してるからね。

普段の仕事にパチュリーちゃんの介抱、パチュリーちゃんの代わりに霧の管理に、霧の魔力と、普段とは違う『異変』という非日常が起きたせいでテンションが上がって若干活発化している妖精達の起こす問題の処理。

ココ最近あまり寝てないんじゃないだろうか。

いや、時間を止めて寝てはいるのか？

どちらにせよいつも以上に疲れているだろう。

恐らく咲夜ちゃんは博麗の巫女を妨害するだろうから、疲れていたら動きに支障が出るだろう。

そうなるのは可哀想だからね。やるなら全力で気持ち良く。

イヤらしい意味はないよ。

「は、はい。失礼します」

いつもみたいに綺麗なお辞儀をしてフラフラと去っていく咲夜ちゃん。  
……  
休め、もう休むんだ!!

「……………クシユン!!」

ロミオ様がクシヤミ……………!?可愛い……………。

じゃなくて、まさか何か病気を患って!?

「ロミオ様、大丈夫でしょうか!」

『ああ、気にしないでいい。誰かが噂しているんだろう』

瞬間、体の中で何かが折れた。

ロミオ様のらしくないクシヤミに動揺して、気が抜けていたのでしょうか。

別段、気にせずに出声を出ただけで、こうも易々と私の心をその重圧でへし折った。

やはり、この方の重圧は人間には重すぎる。

レミリア様やパチュリー様など、人間から外れている方達であれば、自分より上だと

思うだけでしよう。

だが人間相手なら、一瞬で廃人にしてしまう。

「そ、そうでございませうか……………。出過ぎたマネをどうかお許しく下さい」



私は、長らくここで過ごしているおかげかなんとか耐えられた。

『良い。咲夜も連日の仕事で疲れているだろう。もう下がっても良い』

そんな私の様子に気付いたのか、心做しか気遣う言葉を掛けてくださるロミオ様。

私は言われた通り、一言と礼をしてフラフラと部屋を出ていった。

## 一方その頃……

「うーむ……」

やっぱり、こうかな。

「よくぞここまで来たな人間。まずは賞賛を贈ろうじゃないか」

…… うーん、それかこっちは？

「矮小な人間のくせによくやることだ……。 こういうのを意地が汚いと言うのか？」

いやこれは印象が悪いな。

…… ん？今何をやっているか？

異変を解決に来た人間に会ったときの口上というか、名乗りというか……。

魔王が勇者を迎える時に言うあれだ。世界の半分をやるうみたいな。その練習だ。

今回の異変は吸血鬼がラスボスだ。つまり私もラスボスの一部に入るわけだ。こういう名乗りがあつた方がカッコがつかうと思つたのだ。

まあ、ラスボスの様な戦う力など持ち合わせてはいないのだが。

「来たのなら歓迎をしよう。曲がりなりにも客人だからな。となると持て成す必要があるわけだが…… 吸血鬼が客人の時と人間が客人の時では勝手が違ってな……」

なあに、死ぬわけじゃない。死ぬわけじゃ、ね？」

いやこれは悪役過ぎる。後々の関係に支障が出る。

もう少しこう：：：。なんとというか、憎めない感じにしたいのだが。

「フハハハハハハ!! さあ抗ってみせろ!! いやなに、最近暇を置いていてな!! ある程度満足したら止めにするから、それまで少し付き合ってくれたまえ!! フハハハハハハ!!」

こんな感じか? いやこれだとウザがられるかもしれない。

いやでも、うーん、わからん。

その日は、部屋からは彼の唸る声や高笑いも聞こえてきたりと、少しカオスなことになつていたそうだ。

：：：：。にしてもこの男、ノリノリである。

「さ、咲夜。やっぱりこうかしら？」

「どれもお似合いですよ、お嬢さま」

「そうじゃなくて…… うう……」

お嬢さま可愛い……

お嬢さまは今、博麗の巫女なる者と相對した時の為にポーズを決めている。

腕を組んでみたり、手を腰に当ててみたり、後ろに組んでみたり、胸に手を当ててみたり。

お嬢さまは鏡に映らないので、私が見て決めろとのことだった。

偉そうだったり、自信満々だったり、あざとかったり、不思議だったり。

どのお嬢さまも魅力的だ。

はあく…… これだけで最近溜まっていた疲れが取れていく様だ。

「あら咲夜。鼻血が出てるわよ？」

え？

はつとして触れてみると、確かに指に血が付いた。

「も、申し訳ありません!!お見苦しい所を……」

うう、恥ずかしい。

従者失格だ。まさかこんな失態を犯すとは。

普段は顔に出たりしないのですが.....

言い訳にもならないでしょうけど、それほど疲れが溜まったのかしら？

「ああ、もう、もつたいないわねえ」

そういうと、お嬢さまが近づいて.....ち、近い!!近すぎます!!

ああ、お嬢さまの優しい香りが.....ああ.....!!

「ん、ちゆる」

「つつつ?!?!」

そしてお嬢さまは、私の鼻血を舐めとつた。

「ちゅ、ちゅー、レロ、ちゅっ」

「ん.....ああ.....はあん.....」

お嬢さまの小さな可愛らしい舌が私の唇や鼻を犯す。

お嬢さまの匂いで頭がボーツとして来た.....

「ふふ、咲夜の血はやつぱり、味も甘くて口溶けも良くて.....美味しいわねえ」

そう言つて頭を撫でてくださった。

ああ、もう、死んでもいい.....

「咲夜.....?ちよ、咲夜あ!?だ、誰かあ!!咲夜が倒れたア!!」

その日、妖精達に担架で運ばれながら、とても安らかな顔をするメイド長の姿が見られたそうだ。

「…… 来ない」

いつか来る、いつか来るとは言っていたが、遅い。遅すぎる。

まっつっつっつたくロミオが来る気配がない。

「何か上であつたのかな……」

ロミオがフランを見捨てるなんて思えないし思いたくない。

とすれば上でなにか起きていると考えるのが妥当だろう。

ロミオが迷惑することだろうか。

それはダメだ。

少女は思った。

『会いに來ないならこつちから行けばいいや!!』

## 暴れ巫女と方向性を間違えた吸血鬼（前）

途中で邪魔しに来た人食い妖怪や氷精、更には門番をくぐり抜け、現在私はメイドを倒した所だ。

「そろそろ少し疲れてきたわね……。なんであのメイドはあそこまで必死だったのかしら?」

メイドの必死さと言ったら、とんでもない物だった。

『あ、貴女?も、もう無理しなくても良いんじゃないかしら……』

『ガフツ、グヴオアア……ゼエ……ゼエ……ア、アアア……。とお、して……なるものかあ……』

お、お嬢さま……そして、あの方に……あの方と、出会わせるわけにはあ……』

それを最後に、メイドは自分の血だまりに倒れて行った。

息はある。流石こんな人外魔境で生きているだけあって、タフだ。



メイドの目は充血しており、血涙でも流れんばかりだった。

何がああ、メイドをあそこまで駆り立てたのか……………。

それに、『あの方』とはなんのことだろうか……………。

「気になるけれど、それよりも異変が先よね」

巫女は歩を進める。

地下室から出ると、パチエが本を読んでいた。

「久しぶりだねえ？パチエ」

「ツ!?ふ、フラン!?!」

驚いた拍子にそのまま後ろに椅子ごと倒れたパチエ。

本当は本名があると思うんだけど、アイツがパチエを紹介しに来た時、『友達のパチエよ』としか言わないし、パチエも本名を言わなかったりで、それしか呼び方を知らないの。それ以降地下には来てないし……………。

でも、そんなに驚くことかなあ……………。

まあそんなのはどうでもいいか。

「ねえねえパチエ、ロミオは？どこにいるか知ってる？」

「ろ、ロミオなら多分部屋で……って、どうやって出てきたの!？」

「普通に壊して。そんなのより早く、ロミオの部屋は？」

「上の階だけけれど……悪いわね、今は取り込み中なのよ。出るのもう少し待ってもらえる？」

「ん？取り込み中ってなに？」

「お祭りの様な物よ。貴方が出てくるのは企画外だから、出て行くのならまだ後にしてくれないかしら？」

「……出ていったらロミオは困るの？」

「……困るんじゃないかしら？」

「そうか。ロミオが困るんだ。」

「ならやることは一つだね。」

「解った。待つ」

「そう言つて、フランは近くにあつた本棚から本を適当に取つて読み始めた。」

「まあ……そのちよつと後に普通の魔法使いが飛び込んでくるのだが……。」

「さ、咲夜……大丈夫なのかしら……」

咲夜が血まみれになる未来を見たレミリアは、不安と心配で頭が一杯だった。

もはや博麗の巫女とか忘れかけていたが、咲夜と戦っている者の服を見て思い出した様だ。

自室の椅子に座り威風堂々として迎えようと思っていたのだが、今は家具屋さんに来た子供が「わー!!校長先生みたーい!!」とはしゃいで椅子に座った感じに見えるくらいにはカリスマが薄れている。

要するに子供である。

「うう……ロミオはいないし、パチエは相変わらず読書だし、使い魔は前の戦争でほっとんど死んじゃってたし……。美鈴は寝てるかやられてるだろうし……」

咲夜を迎えに行こうにも誰にも頼めない現状。

ここを離れて自分から咲夜を迎えに行ってる間に例の博麗の巫女が来て「誰もいないじゃん……」となってる時に咲夜を背負ったまま部屋に戻ってきて鉢合わせたら……。

格好がつかないなんてものじゃない。

「どうすればいいのよお…… 咲夜あ……」

博麗の巫女が着いた頃には、少し目が腫れていたらしい。

「ふふふ…… ようやくキャラが決まったぞ…… !!」

ロミオはガッツポーズを取った。

自分のキャラを決めるのに苦節2時間。

一刻程鏡の前に立ちっぱなしだった。途中から鏡を見る度「こいつ誰だ？」と自身の姿にゲシュタルト崩壊を起こしていた。

…… おっと、その君。

『なんで吸血鬼が鏡に映ってんだ』ツツコミを入れている様だから、説明しておこう。

知つての通り元々吸血鬼は大きくわけて二種類居て、「純血」と呼ばれる生まれながらの純粹な吸血鬼と、その純血に眷属にされて後天的に吸血鬼になった者の二パターンがある。

で、有名になつてゐる吸血鬼の大半が純血なのだ。

そのせいで、人間には純粋な吸血鬼としての特徴だけが広まった。

その特徴とは、まあ有名なのだ。『銀が苦手』や『流水（雨も入る）が苦手』。あとは『鏡に映らない』。『日光が苦手』『十字架が苦手』などもある。少しマイナーだと『許可が無ければ他人の家に入れない』などが挙げられる。

この多くの弱点や特徴の中で、眷属と純血とで違うものが幾つかある。

『鏡に映らない』と、『許可が無ければ他人の家に入れない』だ。

理由はわからない。だが、私は現に鏡に映っているし不法侵入もお手の物だ。

私は生まれながらの吸血鬼なのだが……。力が弱いせいかな？

眷属にされて後天的に吸血鬼にされた場合は幾つかの弱点は減るが、能力や力は格段に下がるのだ。

そんなことがありながらもようやく確立させたキャラ。

これがスベル様ならもう二度と部屋から出ねえ。

心に強く決意しながら、最後の仕上げにかかる。

少しして、ようやく自身のキャラに自信が持ててきた。

「行ける……私なら行ける……!!」

緊張しながらも、ドアノブに手をかけ部屋を出た。

同時にキヤラを演じる。

彼が選んだキヤラとは…………。

「人間…………人間はどこだあ!!!!」

当初の予定とは全く違い、狂戦士風であった。

## 暴れ巫女と方向性を間違えた吸血鬼（中）

「ハハハね……………」

巫女は、大きな扉の前に立っていた。

「ひぐつ……………グス……………ざぐやあ……………」

中からは情けない泣き声が聞こえてきていた。

「入るわよ」

ギギイつと度合いを開ける。

中に居た少女は急いで目元をグシグシと拭い、胸に手を当てる不思議ポーズを取り出した。

「よく来たわね。博麗の巫女さん？」

「御託は良いわ。チャツチャと始めましょ。疲れたから寝たいのよ」

「あらあら、つれないのね……………まあいいわ」

少女はコツコツと歩き出し、大きな窓を開け、庭が一望出来るベランダから飛び上がり、霧のせいで紅くなった月を背にした。

少女は手招きする。巫女はそれに応じ、同じように浮かび上がり相對する。

「私はこの紅魔館の主を任されている、ヴラド公の子孫であり純血の吸血鬼、レミリア・スカーレットよ」

「そういうのはいいわ。するんでしょ？ 弾幕ごっこ」

「血気が盛んなことね……………」

「良いわ。こんなに月も紅いのだから……………本気で殺しても良いのよね？」

「はあ……………全く」

「うふふ……………本当に」

「「永い（楽しい）夜になりそうね」」

『稀代の天才巫女』博麗霊夢 VS 『純血の吸血鬼』レミリア・スカーレット

開

幕



「いい加減、本を返しなさい!!この泥棒!!」

「だから、死ぬまで借りるだけだぜ!!」

図書館では現在、突撃して来た魔法使いと喘息持ちの魔法使いが飛びながら弾幕をばら蒔いていた。

「…………… まだ出ちやダメかな」

そんな中特に気にする事もなく、フランは本を読みながらソワソワしていた。

2人の魔法使いの戦いはいよいよ終盤を迎え、お互い最後のスペルカードとなった。

『恋符』 マスタースパーク!!」

「水&木符ウォーター…………… ゴホオ!!」

スペルカードを宣言し終わる前に持病の喘息持ちが発動し、マスタースパークが直撃してあえなく撃沈。

『普通の魔法使い』 霧雨魔理沙 VS 『喘息持ち』 パチュリー・ノーレッジ

勝者、普通の魔法使い

「……………つ、疲れたぜ」

「ねえねえ、フラン、暇なんだよね」

パタンと本を閉じて、椅子から降りて立ち上がるフラン。

「そのー………弾幕ごっこだっけ？これから使うだろうし、少し練習したいんだよね」

「え、えーつとお……………逃げるぜ!!」

「ダメー♪」

霧雨魔理沙 VS 『ヤバイ吸血鬼の妹の方』 フランドール・スカーレット

開戦

ここで、少しだけ閑話を入れよう。

本来の流れだと、フランドールはその圧倒的な火力と身体能力。

そして天性の弾幕の才能で魔理沙、もしくは霊夢を追い詰めたが、最後には実戦経験の少なさ、更には人間の底力と言える勢いで押し切られ負けてしまう。

……恐らくだが、このどれか一つでも欠けてしまっていたら、負けていたのは霊夢、魔理沙だっただろう。

ん？なぜ急にこんな話をするかって？

まずは、これまでのフランの『戦績』を見てみよう。

「今までで全力で殺し合いをした数」

なんと怒涛の23万回!!!

これまでのロミオとの戦いは、全て殺し合いだった。

まあ相手は死なないのだが。

更に、これを見て欲しい。

「はあああ…… ははは、あんたやるねえ!!」

「ロミオ以外でこんなに戦えるのは初めてだよおおおお!!」

これは、パチュリーが前回ポーカーで負けた時に、案内したフランの部屋で行われた戦いのほんの一部である。

見てわかる通り、互角である。

むしろ萃香の方が押されてるまでである。

ここまで原作から離れてしまったフラン…… いや、HURANとの戦いは、一体どうなるのか。

「……………博麗の巫女はどこなんだ」

現在、廊下でぼつんと佇む吸血鬼が1人。

「はっ!!ダメだダメだ……………キヤラを崩すな」

そう言つて吸血鬼は、口を三日月の様に歪め、正気を失つた様な感じを見せる。

「血だ……………。血が足りんのだ……………」

幽鬼の様に歩き続けるロミオ。

その足はゆつくりだが、不気味だった。

すれ違つた妖精が何体か居たが、視界に入る前に逃げ出すのが殆どで、視界にでも入ろうものなら、青ざめてぶつ倒れる。

ふとロミオは思った。

そうだ、もうレミリアの部屋に居るんじゃないか？

## 暴れ巫女と方向性を間違えた吸血鬼（中2）

「やっとついた……………」

レミリアの部屋の前まで漸く来れた。

この館、中が外見の10倍は広いから、当然階段や廊下も長くなってるので疲れるのだ。

「おっと…………… キャラを保つんだ……………」

顔を歪め、少し狂ったかのように髪を乱して…………… 良し。

「博麗の巫女はあ、ここかああああ!!」

扉を開けた瞬間に垣間見えた紅白に飛びついた。

「な、なによあんだ!?!」

神主さんが「かしこみかしこみ」とかするような棒で私の手を止める巫女っぽい女性。

硬い……………!?!木ってこんなに硬いつけ!?!最近の木って凄い!!

「何よ…………… この感じ……………!?!レミリア!!こいつなによ!!」

お、レミリア近くにいるの?

目だけ動かすと視界の端に少し傷付いたレミリアが写った。

……あれか？最近聞いた弾幕ごっこだっけ？それやってたのかな？

「ろ……ロミオ？貴方、どうしたの!？」

そうだね。うん。こんなキ〇ガイが急に入ってきて急に殴りかかってたらそりやそうなるよ。

「とにかく、離れなさい!!」

棒で手を払われて腹に蹴りを入れられてしまった。

痛い!!骨まで響く良い一撃だあ……。人間が出していい力では無いな。

これが博麗の巫女か……。負けるなこりや。

なんかこの棒とか、触れるだけで少し熱いし……。

多分それという相手用だよねそれ。恐ろしい。

「レミリア、あれはなんなの?」

「あの人は私達の同居人よ……。普段は落ち着いているのだけれど……。」

『浮いてる』筈なのに、なんなのよこの重圧!!」

あれ、なんか巫女さんが苦しそうだ。

そう言えばさつきまでレミリアと対戦してたんだよね。連戦はキツいか。

少々強引だが流れを変えよう。

「どうした博麗の巫女……。動きが鈍いじゃあないかあ……。それとも何か、体を

動かすのは得意ではないか？ よろしい!! それなら君達が得意だという弾幕ごっこでもしようじゃないか!! なに安心してくれたまえ。ルールは弁えている。要するに撃つて避けて当てれば良いのだろうか?」

そう言つて少し距離を開けて、戦闘狂っぽく早速妖力の球を作る。

「さあ始めよう!! ほらほらどうした、月のせいで狂いそうなんだ……!! さつさと始めんとここら一带を消し飛ばしかねんぞ博麗の巫女お!!」

出来もしないこと言つて、様がおかしいのを月のせいにするのでレミリアに「あれ、演技?」と分かつてもらうようにする作戦なのだが……。

「ロミオ…… 仕方ないわね。博麗の巫女、ここは共闘よ。彼が相手じゃ2人でも勝てはしないだろうけど、彼が落ち着くまで耐えるのよ!!」

「勝てないって…… どんだけ化物なのよこいつ……」

あつれー? レミリアさん? そこは俺が負けるのを見守る所ですよ?

これじゃ『博麗の巫女に負けてボコボコになる』んじゃなくて、『博麗の巫女とレミリアに負けてズタズタになる』じゃん。

一応のイベントボスとして出てきて博麗の巫女に負けて後はまあどうにかなるだろうと、ただ異変に出たいがための後先考えない行動だったのだが……。

まさかレミリアと博麗の巫女にリンチされるとは思いもよらなかつたなあ。



まあいいや。なに、死にやしない!!  
かかってきなさい（涙）



「なら良かったぜ!!でも勝つのは私だぞフラン!!」

「ダメ!!勝つてロミオに褒めてもらうんだもん!!」

フランが少しづつ押していく。

段々と勢い付くフランとは対象に、八極炉の魔力が減ってきたのか、マスタースパークの威力が少しづつ落ちてきた。

しかし、魔理沙も負けじと己が魔力を注ぎ込み押し返す。

フランも横薙ぎにしていたレーヴァティンも刺突の形にし、突進力を上げる。

弾かれた魔力がドレスを所々焦がして行く。

だがそんなのはお構い無し。イチイチ気にしてられない。

「おりやあああああああ!!!」

「はあああああああ!!!」

お互い、最後の力も振り絞る。

そして、遂に決着が着いた!!

魔理沙のマスタースパークが、先に切れたのだ!!

「やった……. やった!!フランの、フランの勝ッ」ドツゴオオオン!!!

……がしかし、フランの勢いを止めるものが無くなり、フランはそのまま壁に激突。上半身がめり込む形になった。

「これは……どうなるんだぜ？」

魔理沙 VS フラン

引き分け

---

「(ﾟ)ちから行くぞお!!」

ロミオ・スカーレット V S レミリア・スカーレット&『暴力巫女』博麗霊夢

開幕

内心涙目になりながら博麗の巫女……長いから「巫女ちゃん」と呼ぶことにする。  
巫女とレミリアに向かって弾幕を投げつける。

「博麗の巫女、絶対に当たっちゃダメよ!!」

「なんでよ?!」

「見てわからないの!?!すり潰されるわよ!?!」

なぜあんなに必死なんだろうか。すり潰されるってそんなミキサーみたいな  
な……………。

レミリアよ、その冗談は私のハードルを上げるだけなので止めなさい。

スルスルと私の弾幕を避ける2人。ズンズンとこちらに突き進んでくる。

「もうとつとと片づけるわよ!!」

『霊符』夢想封印!!」

巫女ちゃんが馬鹿でかい虹色の弾幕を複数個放ってきた。

それと同時にレミリアの弾幕も。

大きい弾は追従機能も強く、どこまでも追いかけてきそうだ。

それと近づく度にジリジリと肌が痛む。その名の通り封印機能も付いているのだから。

「なかなかどうして厄介な物を作るものだな……」

「あんたのが厄介よ!!」

声を揃えて言うのか……。

相手がスペルカードを切ったのなら、こちらも使った方が演出的に良いだろう。

なので、フランちゃんと一緒に作ったお揃いのスペルカードを使わせてもらうことにした。

『魔剣』レーヴァテイン」

影を固めたような色をした細い刀身が私の手に現れる。

追従してくる大きな弾を軽く斬ると、バキバキと音を出しながら小さくなり、最終的には消えてなくなった。

やっぱりこれ、弾幕ごっこには向いてないよね。

このスペルカードの効果は、視野を邪魔するための黒い霧を出すのと、刀剣に触れた物を重力と魔力で捻り潰すと言う脳筋系スペルカードだ。



そこで私は、一つの答えを得た。

そうか……。巫女っちゃん、暗所恐怖症だったのか……………。

済まない。弱点を突くことになるとは思ってなかった……………。

起きたら謝ろう……………。

ロミオ・スカーレット V S レミリア・スカーレット&博麗霊夢

勝者 ロミオ・スカーレット



## 【裏話】 暴れ巫女とカリスマ吸血鬼

それは、私が博麗の巫女と弾幕で戦っている時だった。

私は少し疲れが見えてきたが相手はまだまだ余裕そうね。

でもまだまだこれからよ。そう考えていた時だった。

『博麗の巫女はあ、ここかああああ!!!』

ドタン!!と扉が開かれると共に何か博麗の巫女に飛びついた。

それは吐きそうになる程の狂気と殺意を放っていた。

恐らくは殆どが博麗の巫女に集中している筈なのに、私でもそう感じ取れる程の濃い狂気。

一体なんだ？何が起こっているんだ？しつかりとよく見てみると……。

「ろ……ロミオ？貴方、どうしたの!？」

大人しくしていた筈のロミオだった。

「な、なによあんだ!？」

急に飛び込んできた奴の攻撃をお祓い棒で受け止める。

キシキシとお祓い棒が悲鳴を上げる。込めた霊力が震える。

『浮いている』筈の私にも伝わる濁った狂気と鋭い意思。

それが、果てしなく不快感を煽った。

「何よ……この感じ……!!レミリア!!こいつなによ!!」

レミリアに叫ぶ。

私の『勘』だが、レミリアの知り合いなのだろう。

「ろ……ロミオ? 貴方、どうしたの!？」

どうやらロミオと言うらしい。

ただこの不快な感じを浴び続けるのは我慢の限界だった。

お祓い棒で抑えていた手を上手く逸らし、脇腹に霊力を込めた蹴りを入れて一旦距離を取る。

レミリアに近づきアレのことを少し聞く。

「レミリア、あれなんなの?」

「あの人は私の同居人よ……普段はおちついているのだけれど……」

この間にも、アレからのプレッシャーが私の中にまで響いてくる。

こういう精神などに響く能力に対しては強い筈の私の能力を貫通してくる。

『浮いてる』筈なのに、なんなのよこの重圧!!』

私がレミリアを問いただしていると、ロミオと言う（恐らくは）吸血鬼が声をかけてくる。

『どうした博麗の巫女……。動きが鈍いじゃあないかあ……。それとも何か、体を動かすのは得意ではないか？ よろしい!! それなら君達が得意だという弾幕ごっこでもしようじゃないか!! なに安心してくれたまえ。ルールは弁えている。要するに撃つて避けて当てれば良いのだろうか?』

勝手に納得して勝手に捲し立ててくる。

発言と同時に弾幕を張る準備をする吸血鬼ロミオ。

これはもしかすると、レミリアと敵だなんだと言ってられる状況ではないのかもしれない。そうしている間にも目の前の吸血鬼は妖力の球を作り出している。

『さあ始めよう!! ほらほらどうした、月のせいで狂いそうなんだ……。!! さっさと始めんとここら一帯を消し飛ばしかねんぞ博麗の巫女お!!!』

「ロミオ……。仕方ないわね。博麗の巫女、ここは共闘よ。彼が相手じゃ2人でも勝てはしないだろうけど、彼が落ち着くまで耐えるのよ!!」

どうやらレミリアも同じ考えだった様で、共闘を持ちかけてきた。

だがレミリアと私を合わせても勝てないって……全力を出していた訳じゃないのだけれどそれでもそれなりに力は出していた筈だ。

「勝てないって……. . . . . どんだけ化物なのよこいつ……. . . . .」

しかし、呆れる暇もないようだった。

『こちらから行くぞお!!』

吸血鬼が弾幕を張ってきた。

黒っぽい紫の妖力弾をそれなりの密度で張ってくる。

しかし余裕があるのでできるだけ疲労しないようにストレスで避けて……. . . . .

「博麗の巫女、絶対に当たっちゃダメよ!!」

「なんでよ?!」

ストレスで避けようとした時にそう言われた。

「見てわからないの!?! すり潰されるわよ!?!」

どうやらストレスで回避することは出来ないみたいね……. . . . .

一個一個わざわざ迂回するように避けるとなると使う体力は大幅に増える。

やっかいな弾ね……. . . . . !!

「もうとつとと片付けるわよ!!」

『靈符』 夢想封印!!』

スペルカードを切ってごり押すことにした。

追従する大きな弾幕を前に、少しばかり厄介そうな顔をする。

『なかなかどうして厄介な物を作るものだな……』

「あんたのが厄介よ!!!」

レミリアと声が合ってしまった。

多分誰でもこう思うのだろう。

夢想封印が当たりそうになったその時。

—— 『魔劍』 レーヴァテイン

黒い細身の剣が吸血鬼の手元に現れる。

それで夢想封印を切りつけると…… バキバキと空気に押しつぶされるようにし

て消されてしまった。

どうやら切りつけた物に何らかの圧力を与える様だ。夢想封印が消されるとは思わ

なかつたけれど。

「これは……霧?」

同時に剣から黒い霧の様な物が出てきた。

「博麗の巫女!!早く払いなさい!!!」

「え……？」

言われた時はもう、遅かった。

見える景色が変わり、神社の前に立っていた。

何が起こったのかわからなかった。

後ろでなにか音がした。振り向こうとすると何か足に当たる。

見てみると、見慣れた白黒の知り合いが……魔理沙が私の足の下に居た。

『何故か、首より上は無かった』

「あ、」

脳の理解が間に合わず声が漏れる。

見てみると、魔理沙だけじゃない。

藍に橙、霖之助さんに湖の妖精等……私の知り合い全てが足の下に積み重

なっていた。

「ああ、」

魔理沙の様に首がないだけじゃない。

綺麗なままだったたり、頭半分が消えてたり、逆に首以外無かったり……。



「落ち着きなさい!!」

レミリアの声で景色が戻る。

それでもあの光景が視界に浮かぶ。

「ひっ!?止めて!!」

レミリアが伸ばした手を弾く。

体の震えが収まらず、涙が止まらない。

止めて、来ないで、やだ、やだ、やだやだやだやだやだやだあ!!!

あ、あ、ああ、うあ、いいい!!!ア、ア、ア、ア、□#○くfねうあhd  
!!!!!!

そこで意識を失った。

起きたら、吸血鬼が土下座をしていた。



## ロミオの過去

私が物心付いた時には、数多くの従者が周りに居た。

おおよそ6歳の頃だった。従者の手伝いをしようとするのと泣いて止められ、声をかける度に小さな悲鳴を上げられた。

幼いながら嫌われる悲しさを覚えた。

両親ですら私を家族とせずに、頭を下げて顔を向けてくれなかった。

「何もしなくてよろしいのでございませう……」  
「貴方様は存在するだけで我等が希望でございませう故に」

邪魔だったのだろう。適当に持ち上げとけば大人しくすると思っていたのだろうか。

親を親とすることすらも許して貰えなかった暗黒の幼少期である。

私が寂しさに泣くと従者は頭を掻きむしりながら部屋を出ていく。

子供の泣き声は愛おしい子供ならなんとも思わないと聞いているのだが……。

相当に嫌われているらしく、育児放棄が多発した記憶がある。何故自分から皆離れて見るだけなのか。

子供の私には理解ができなかった。

私の従者や両親はよく嘔吐をしていた。

「静まってくださいませ!!坊っちゃま!!う、オエエ!!」

視界に入るだけでも嫌らしかった。

それから従者には出来るだけ私を見ないように頼んだ。やはり嬉しそうだった。

私が12歳の頃。多感になる時期である。

皆が私の姿を見てくれない。

基本下を向いている為、顔を覚えるタイミングが少なかったが為に頭や髪型で覚えるしかなかった。

何故皆が私を見ないのか聞くと「恐れ多い」かららしい。

あくまでも従者にとっては主人の子か。

魔力が絶大やら王になる器の持ち主やら、今思えば適当なことを言われていたように思う。

多感な私はそれを真に受けて恥をかいた。

勝てる筈もない公爵相手に勝負を仕掛け「恐れ多い」と大人な対応をされた。

戦う価値もないか……。そう理解した。

私は嫌われていたので従者もよく変わっていた。

前の者がどうなったか聞くと口を噤む。

私なんかには言ってくれないようだった。

両親は相変わらずだった。

「おお……こんなに立派になられて……」「私達から生まれたとは思えないほど……ああ……」

まともに親らしいことしていないと思うのだが……。

白々しい上に皮肉まで飛んでくる始末。

前までは怒っていたが、わざとらしく怯えたフリをしてバカにしてくる為、今では呆れた目で見えれない。

私が50歳の頃。

従者が少し私のことを見てくるようになった。

その頃の私は嫌われていることを受け止め出来るだけ気配を消していた。

それをバカにするように今更世話をかけてくるようになった。

陰湿な嫌がらせをされても耐えに耐えた。

両親は更にイヤミになった。

「おお、自らの力を自覚されたのですな……？」「めでたき事でございます」

自らの力の弱さを認めて気配を消していることを馬鹿にしているようだった。  
……もう慣れた。

私が70歳になった日に、両親に別れを告げて旅に出た。

両親は最後までバカにしてきた。

「おお……!!遂にでございますか!!」「ここは貴方様にとってはやはり矮小すぎたので  
（ご）ごいましょう」

自虐までして馬鹿にするか……!!

縁を切ることを誓った。

その日からはや630年。私は大切な家族と過ごしている。

一言いうとすれば……。

ざまあ見ろこの嫌味共!!私は幸せにやっているぞ!!

全く一言ではないが久しぶりに思い出して憂鬱になったので勘弁して欲しい。

暗所恐怖症で追い詰めてしまった巫女っちゃんの介抱をしているととっさに思い出したのだ。

たまたまに私に勝負をしかけてくる吸血鬼を相手した時には何度殴られても傷の付かないサンドバッグのようにされた。

喧嘩もまともにしたことがない私に拳を振るうのは怖いことだった。なすがままである。

他の吸血鬼が「私の力をロミオ様に……」と見せつけるように山を消し飛ばしたりしていたが、私は全力を出しても精々が岩を砕くぐらい。

毎回何故か周りには動物の死骸が大量にあったが……中にはたまたまに吸血鬼がノリで倒れたりしていた。

周りの吸血鬼は震えて笑いを堪えていた。

こんな情けない思いをするのが嫌だったのも旅に出た理由でもある。

結果幸せになれたので、後悔も反省も当然ない。

そんなことを考えていると巫女っちゃんが目を覚ましたらしい。

さて、誠意を見せる時だ。

私は地面と見つめあった。

恐らくこの吸血鬼は気付かないのだろう。

自らの巨大な力に。

内なる魔力の奔流を上手く抑えることが出来ずに周りに撒き散らしそれが威圧感になっっていることに。

強大な魔力を技量不足で抑えることが出来ずに暴発させ周囲の動物を全てシヨック死させ、力の弱いながら吸血鬼すらも潰してしまったことに。

彼はまだ知らない。自分が何者なのか。

## 謝り倒す吸血鬼

「本当に、本当に申し訳なかった!!」

現在私は、目を覚ました巫女ちゃんに膝と手を地につけ誠意を見せる……所謂

『土下座』をしていた。

「……………え？」

「まさかこんなことになるとは思ってなかった!!本当に悪い事をした!!」

「お、落ち着きなさい!!」

巫女ちゃんが怒鳴られてしまった。

何かおかしいところがあつただろうか？

「スウ……………ハア……………とりあえず、あの後何かあつたのか、そして貴方があそこで

乱入してきた理由を言ってもらえない？」

なるほど。現状を理解したいようだった。

私は巫女ちゃんに、あの後私が巫女ちゃんの介抱をしていたことと、異変に参加したかったことを伝えた。

「あんたねえ……………ハア……………人騒がせにも程があるわよ」

面目ない。

「アンタみたいなのが急に入ってきたらパニックになるくらいわからなかったわけ？」

「……パニック？」

結構冷静だったように見えたが。あれか？内心では結構焦ってたのか？

「まあいいわ。今度からはそういうのは止めておきなさいよ？」

「肝に銘じておく」

とりあえず許してもらえたか。

あんなことをしても許してくれる博麗の巫女は優しいな。今度お賽銭でも入れに行くことにする。

「それで、私はどれ位寝込んだのかしら？」

「2日だ。君の友人だという魔法使いはレミリアの妹の相手をしているよ」

巫女つちちゃんを運んでいる時に会ったのだ。

状況を説明すると何故か怪物を見るような目で道を譲ってくれた。なんだかシヨツクだった。

「アレに妹なんて居たのね……名前は何？」

「フランド。フランドール・スカーレット。基本はいい子だよ。だが少し癩癩持ちだね……」



だが高さか知らないところでフランちゃんに友人ができているとは思わなかった。いい事だがなんだか成長する娘を見る親の気分だ。

あ、そういうえば……。

「思い出したのだが、フランに呼ばれてるんだった。少し失礼するよ」

巫女っちゃんの目が覚めたら行くようにレミリアから言われていたのだった。

巫女っちゃんは「良いからさっさと行きなさい」と送り出してくれた。

フランちゃんに会うのは久しぶりだな……。体調崩してないかな。

「フラン!!お前凄いな!!この2日でこんなに成長できるやつは初めてだぜ!!」

「フフーン、凄いでしょ凄いでしょ♪」

フランちゃんの居る地下に行ってみると、魔法使いの子と仲良さそうに弾幕ごっこをしていた。

邪魔するのも悪いと思ひ見ていると、フランちゃんが気付いた様だった。

「あ、ロミオ!!」

目を見開いて全力の笑顔で突撃してくるフラン。

これはあれだ。受け止めるやつだな。

「ロミオオオオオオオオオオ!!!!」

腕を広げて受け止めようとしたが……。

グシャツ!!という音を立ててフランが私の胸に突き刺さってしまった。

「フラン、勢いを付けすぎだ」

「えへへ〜♪ローミーオー♪」

こりや聞いてない。

私に突き刺さったまま手足をパタパタしている。

あの、ちよつと、傷がえぐれるから大人しく抜けて？

ほら、魔法使いの子も「何してんだこいつら」って呆れてみるよ？

「もうツツコまないぞ……」

ほら!!なんか言ってるよ!!

せつかくの友達ドン引きしちゃってるよ!?

「えへへ〜♪ロミオの血……おいひいいい……」

ダメだこりや。聞いてない。

結局最後は私が自ら引っこ抜いた。

フランは私に乗ったまま擦り寄ってくるだけだ。

魔法使いの子はいいのかと聞くと

「魔法沙とは2日間めいっぱい遊んだからいいの。久しぶりにロミオと話せるから嬉し  
いっ」

とのこと。魔法使いの……魔法沙ちゃんだっけ？

魔法沙ちゃん完璧に呆れてしまっている。

「砂糖吐きそうだけぜ」

とのこと。

魔法沙ちゃんも休みが取れて楽らしい。

「ねえロミオ。久しぶりに遊んでよ」

フランちゃんがそう言ってきた。

別にいいけど魔法沙ちゃんが怪我しないようにはしようか。

「ああかまわんよ。じゃあ魔法沙。少し離れていてくれ。」

「なんなんだあ……？ 弾幕ごっこって雰囲気じゃないんだぜ……」

そりやそうだ。今からやるのはただの肉弾戦だもの。

肉弾戦というか私がサンドバッグになるだけなのだが。

「行くよロミオ!!」

一瞬で近づいて来たフランちゃんは私の頭を搔つ攫つて行く。

私はすぐさま再生させて、再び向かい合う。

フランちゃんは続いて能力で私の心臓部に風穴を開けて来たが瞬きの合間に再生する。

私はフランちゃんがしてきた蹴りを上手く躲し、腹に拳を叩き込む。

まったく堪えた様子のないフランちゃんはお返しと言わんばかりにサマーソルトで私を二つに分割する。

その状態のままわざと二方向からの攻撃を仕掛けるが腕が弾き飛ぶ。

バランスを崩したところに連撃を食らわせられ壁に叩きつけられる。

…… あれ〜? 前よりめっちゃ強くなってるよフランちゃん。

魔理沙ちゃんと遊んだ成果だろうか。

再生しようとする目の中にはニコやかなフランちゃんが。

あれ? なんだか笑顔が怖いんだけど。何その拳。

「ロミオ……なんでこんなに長い間来なかったの? なんで知らない人の匂いにするの? それも濃く」

どンドン声が低くなる。

寂しかったのだろうか。申し訳ないと思ひ答えようとしたら

「はい、時間切れ☆」

その後魔理沙は語った。

「白かった石の壁が上の階のように真っ赤に染まるのを見るしか無かった。

フランの一方的な攻撃でスクランブルエッグの様になっていた吸血鬼が堪えた様子の無いままフランに会えなかったことを謝ると、2人とも笑顔になった。吸血鬼の方は申し訳無さそうにはにかみ、フランは独占欲に塗れた綺麗な笑顔だった……」

## 妹様と王（笑）

フランは今、魔理沙と弾幕ごっこをしている。

ロミオは博麗の巫女とやらの看病をしているらしい。

魔理沙。人間なのに、フランと向き合ってもなかなか壊れない珍しい人間。

勿論加減はしてるけど。それを除いてもとつても楽しい。

ロミオが前に友達を作った方がいいって言ってたけど。魔理沙なら友達になれるかも？

そう思っていると……。

視界の端に愛しい愛しいロミオが見えた。

脊髓反射の様に体を捻らせて、愛すべきロミオに一直線で激突<sup>飛び</sup>する。

「ロミオオオオオオオオオオ!!!♡」

勢いを付けすぎちゃったみたい。貫通しちゃった。

あ、お腹がロミオで温かい……。これ良いかも♡

「フラン、勢い付けすぎだ」

「えへへ♪ロミーオー♪」

腕と足をパタパタしてみる。

昔、フランの狂気をどうにかしようとして来て結局どうにかできなかった嘘つきが、壁でこんなふうには足だけ出してビクンビクンしてしばらくしたら動かなくなった時のことを思い出した。

「えへへへ♪ロミオの血……おいひいいい……♡」

手や顔についたロミオの一部を舐めてみると、餡みたいな甘さが口中に広がって、脳髓から液体が噴き出すのが分かる。

そして背骨に何かが迸ると同時に体が火照って疼く。うへへ。うへへへへへへへへ

へ♡

ん………？

ン？ナニ？コノニオイ。トツテモクサイ。

もう少しロミオの温かさを感じていたかったけど、ロミオに引っこ抜かれちゃった。でも、頭に乗るのは良いみたい。えへへ。ロミオロミオ。ロミってるよ。

なんか変な言葉作っちゃった。

ロミオが魔理沙とはもう良いのかって聞いてくるけど……うーん。

魔理沙は2日間ずっと遊んでたから良いかな。

それに……聞きたいこともデキタシ、ソロソロ思イツキリ体、動カシタイシ。

『ネエロミオ。久シブリニアソソデヨ』

するとロミオは二つ返事で頷いて魔理沙に離れるように言っていた。

そうだね。魔理沙はあれでも魔法使いとは言え人間に近いからね。危ないよ。

「行くよロミオ!!」

フランはまず、ロミオが動けなくなるまでグチャグチャにして動けないようにする。再生して来たらまた壊す。ロミオはこれ位くらいじゃ死なないどころか堪えもしないけど、動けなくはなるよね♪

ロミオの血の匂いで理性が吹き飛びそうになる。だけどそれは今は自重するフランは偉いと思うんだ。後で褒めてもらおうつと。



ふう…… ロミオへのお仕置きは取り敢えずここら辺で一回休めて、ロミオが喋れるくらいになるまで待つてあげる。

「ロミオ…… なんでもこんなに長い間来なかったの？なんで知らない人の匂いにするの？それも濃く」

全く知らない者の匂い…… それもこれ程の濃さなら結構長い間近くにいたんだと思う。

ちようど…… 二日くらいかな？この濃さだと。

そしてロミオが喋り出そうとしたところでまた拳を振るう。

もう少しだけ、体の火照りが収まるまで付き合つてね？ロミオ♡

来なかった理由と匂いの理由は、紅魔館に姉の起こした異変という物の始末に来た紅白の巫女を、ロミオが乱入したことで潰してしまったかららしい。

異変はなし崩しで終了。ロミオは紅白の巫女の介抱、という事だったらしい。

フランは納得した。確かに、優しいロミオなら自分が理由で悪くもない誰かが傷ついてしまったなら、それが例え神や悪魔であろうとも付き添って介抱する。絶対にする。

フランにもして欲しいな。具体的には夜の介抱（意味深）を。フランはいつでも力モ

ン Welcomeだよ。

Heyロミオ!! ファツ〇ミー!!!

私は今、図書館で新しいスペルカードを作ろうとしている。

レーヴァテインだけでは少しキツイ事がわかったので自分も弾幕らしい弾幕を持つうと思ったのだ。真つ当な手段で勝てない相手用に搦め手も含めた。

イメージはあるのだがいかんせん名前が思いつかない。

完成形に近いのは5枚。これだけあればなんとかかなりそうだとは思いたい。自信はないが。

……ん? この四字熟語を一文字ずつ分けて、4枚の名前をつけるのも良いかもしれないな。そうしよう。

最後の1枚は本当に切り札なので、「相手をこれで絶対倒すぞ!!」という名前にしたい。

お、この漢字が良いかもしれない。少し四字熟語の方に漢字の読みが被るが……そこは洒落が効いているということにする。

出来上がったスペルカードは……。

冥符『生』

冥符『殺』

冥符『与』

冥符『奪』

この4枚と、最後に私渾身の出来である一枚。

終『逝<sup>せい</sup>』

うん。漢字は痛い感じだが、よく出来てる様に感じる。

巫女っちゃんや魔理沙ちゃんにはまだ及ばないだろうが、少しは私にも力が付いただろうか。付いてたらしいな。

## 人里の様子と王の視察

「おい聞いたか、例の洋館の話」

「ああ、あの赤い屋敷だろう？」

人里では共通の事態が話題を占めていた。

突如現れた真つ赤な洋館、そこから溢れた赤い雲、それによる体調不良、その元凶や収まった事の始末、現状などのことが話されていた。

「あの騒ぎは博麗の巫女つちゆうお方が治めてくれたそうなの」

「はえ、そりや有難いことだあ」

「今度巫女様の神社にお参りしに行こうかと思うとるんだ」

「俺も行くかなあ。感謝も含めてなあ」

と言ったように、博麗の巫女の話も大変多かった。

当初の霊夢の目的である博麗神社の参拝者の増加も上手く行き、前とは比べ物にならないほどの参拝者が居り賽銭箱の中身も前に比べれば煌びやかになった。

本人は不在なのでこのことは知らない。後日帰ってきて少しして試しに賽銭箱を覗いた時に驚きすぎて叫びながら飛び回り紅魔館付近の湖に不時着するのであった。

その話は置いておいて、今の一番の話題は紅魔館関連なのは明らかだが、その中でも特に話の種になっているのが……。

「聞いたか？あの赤い屋敷のこの妖怪、管理人の正式な決定であそこを住処にするって話」

「それでその主人が小さな少女2人で血を吸う鬼だって話か？」

「なんだ聞いてたのか？」

「今日で7回目だよ。頼むから他の話題を寄越してくれ」

紅魔館が幻想郷に居を構えるという事である。

人里の住人達には『ルールを守らず人里に危害を加えるような連中を住ませて大丈夫なのか』と不安に思っている者も多い。

さらに名前に【鬼】の文字があるのも不安要素である。

絶対的な力を持つと言われる鬼を話でしか知らない者がほとんどの人里だが、その恐ろしさは幼少の頃から伝えられてきている。そんな鬼と同じ文字が使われている詳細不明の妖怪集団となるとどうしても心穏やかには居られない。

このように人里の反応は不安や関心が多い。

「そんなに怖がられているのか……」

そんな中に、馬鹿が一人。

私は今、紫から聞いてきた人里という場所に居る。

スペルカードを作ってみた私が次に気になったのがここだからだ。

日に当たらないように手袋にフードをつけて歩いている。めちやくちや横目に見られている気がするが気の所為だろう。翼もなんとか押さえ込み息を潜めて潜入していると先程の会話が聞こえてきた。

悲しいかな紅魔館、恐れられている。

「まああれだけ大規模なことをしたならそれもそうか……」

人里とは買い物やお出かけなんかで絶対にお世話になるのでなんとか紅魔館の印象を良くして置きたいものだ。

人を襲わないとわかってもらえばイメージ回復できるかもしれない。

そのためにはどうすれば良いだろうか……。

「悩ましいものだ……。この団子美味しいな」

口の中に広がる優しい甘さに舌鼓を打ちながら考える。

焼いた方も買つとけば良かったかもしれない……。店の場所は覚えたのでまたの

機会に買いに行くでしょう。

「あ……お土産に買っとけば良かった……」  
食べたのは黙っていよう。そうしよう。」

## 終わったら大体これ：計画

「「「「宴会い？」」」」」

「そうだ。宴会だ」

人里から帰りながら私が考えたすんばらすいぱーふくとな人里と仲良くなる作戦をみんなにお話する。

「恐らくだが人里とは少なからず関わりが出てくる。それで印象が悪いままだとなにかトラブルがあるかもしれないから、人里を巻き込んで博麗神社で大規模な宴会をしようということだ」

作戦の内容はこうだ。

宴会開くことを告知

←

人里「宴会い？なんでえ？」

←

異変終わった祝いさ!!

←



← 人里「なるほどねえ……他に何が書いてる……？」

← 紅魔館メンバー参戦（迫真）

← 人里宴会行かない派「ファツ!?馬鹿野郎お前俺は行かねえぞ!!」人里宴会行く派「でも酒とか飲めるんやろ?行こう行こう!!」

← 宴会、起動

← 人里宴会行った派「なんや楽しいやんけ!!」

← 紅魔館「私たち怖くないよー」

← 人里宴会行く派「なんやあんま怖くないやん」

← 後日、宴会行った派が行ってな派に宴会でのことをお話する

宴会行つてない派「なんや怖くないんかよかったよかった（即落ち）」↓

←

紅魔館と人里「ズツ友だよ？」

我ながら完璧な作戦である。これを紅魔館メンバーとみこつちちゃんと魔理沙に説明すると、最初に賛成したのは意外にもパチュリーだった。

「良いじゃない。私は賛成するわ」

「ちよ、パチュリー本気!?!そんな事したら紅魔館の威厳が損なわれるかもしれないのよ!?!」

レミリアが嘸み付いた。プライド高いところあるからなあレミリアは。

「威厳つてあんたねえ、考えてみなさい? 私達は人間であるその巫女に1度負けていのよ?」

そう言うレミリアは少し唸つて黙る。しかしまた顔を上げて反論を開始した。

「私はまだ負けてないわ!!それどころか博麗の巫女は私より先に気絶したじゃない!!」

「な、なんですつてえ!?!」

「それはロミオが入ってきたからでしょ?それまで貴方巫女に押されかけてたらしいじゃない」

あれは本当に申し訳なかった。まさかみこつちちゃんが暗闇恐怖症だとは思ひもよら

なかった……。

「私達は人間代表に一度敗北しているのよ？その時点で威厳なんて無いようなものよ。あるのは、報復に人里が襲われないかという不安と、襲うと決めつけてるような恐怖だけ。人里はこれからなにかに利用するかもしれないのよ？良好な関係くらいは得ておかないとダメだと私は思うわ」

「うう…… そんなあ……」

私が言いたかったことを全部言われた。まあいいんだけど。

この件には紫さんにも少し関わってもらおう予定だ。幻想郷の管理者である紫さんに広めてもらって《安全な企画》という事を広めて欲しいのだ。

まだ許可はとってないが許してくれるだろうか。洩られたら少し頼み込んでみるか……。

お酒なんかは紅魔館の備蓄を少し割くことにする。みこっちゃんの方でも集めて貰うように頼むが、もし足らなかつた場合のことを考えてのことだ。

あとワインとか幻想郷で飲んだことある人なかなか居ないと思うからね。

「それじゃあ改めて、宴会に賛成なら手を挙げて」

「賛成よ」

「さんせー!!」

「賛成よ……」

「お嬢様と同じく賛成です」

「ロミオと一緒に賛成!!」

みんな賛成か。それじゃあ早速準備に取り掛かろう!!  
まずは紫さんに頼み込みに行くかな……。

番外編 もしも主人公が一人しかいない系の妖怪だった  
ら 前編

「んう……」

朝日が顔に差し込む。しよぼしよぼする目を擦りながら、頭にある突起物を撫でる。  
近くの水場で顔を洗って目を覚ます。

「ふああああく……よし、今日もがんばろ!!」

俺の名前は『抱きつ鬼(だきつき)』!! 幼女や少女、美女が大好きな健全な鬼だ!!!

事の始まりはある夏のこと。コミケで熱中症になってそのまま死んだ俺は、気が付けば3歳ほどの赤ちゃんになっていた。

それも、森みたいな場所で親もなくだ。当初何が起きたかわからず大泣きした。赤ちゃんの体だからか、驚いていると勝手に泣いてしまった。森でそんな大声出していれば動物などが寄ってくる。

これはもうダメかと、俺は思ったね。虎みたいなのやゴリラみたいなの。色んなのがぞろぞろぞろぞろと来た。

だが予想は当たらず、俺は森の一員になった。

大泣きしていた俺の涙を虎みたいなのが舐め取り、ゴリラみたいなのが俺を背中に乗せてくれた。困惑して泣き止んだ俺に、ほかの動物達が寄ってきては俺の顔や髪をいじり出した。髪の毛に指を通したり、顔を手でグニグニしたり。まるで親戚の子を見た子供みたいだった。

それからは、基本はゴリラみたいなのが親のようにしてくれ、たまに他の動物が世話をしてくれていた。

理由はわからなかったが、とりあえず流れに身を任せるのが一番楽なことだけはわかった。

1年ほどたって、身体的に4歳ほど。歩き始めて言葉を取り戻した俺は、頭に突起物が出始めていることを知った。動物達にこれがなにか聞いてもダメだった。言葉通じないもん。

更に3年ほどたって、寿命で死んでしまう動物も出てきた。流石にこれほどの年月を共に過ごせば、泣くくらいには情が湧いていた。

その動物には子供がいた。世話をしてくれた恩返しに、今度は俺が子供の世話をすると決心した。

そこから大いに時間を飛ばして200年ほど。体は20年目くらいで成長を止め、突起物……角は60年目で伸び切ったようで、人差し指より少し長いくらい止まった。やはり俺は人間ではなかった。薄々勘づいてはいた。

俺を世話してくれた動物はもはや死に絶え、その子供、そのまた子供の子供の子供の子供と、わからないことがありつつも世話をした。いまや森の動物は全て俺の元で育ったんじゃないかと言うくらいには育てた。

たまにする散歩で発見したのが、森の前で大規模な祭事をしている人間達だった。仮面をつけた取締役みたいな人間が、大きな祭壇に穀物やきれいな水、野菜や果物、干し肉など色々なものをお供えしていた。

森を信仰する村とかなのかと思っていると、仮面の取締役の一言で人間達が祈りを捧げだした。

「森神様。獸神様。今年も貴方様のおかげで、こんなにも豊かな作物に恵まれました。私達森の民一同が、祈りを込めて育てた森神様のための作物でございます。どうぞお納

めく下さい……」

言い終わると、巫女のような人が大きな朱色の盃を祭壇の真ん中に置き、少し大きなたつくり(?)から透明な液体を半分ほど注ぎ横にとつくり(?)を置いて離れた……あれは清酒か?

後ろの人間たちも涙を流しながら祈りを捧げている。

しばらく祈った後、取締役仮面の号令で、その場を綺麗に掃除したあと、巫女のような人が水のような物を周囲に撒いて撒収していった。

一体なんだったのだろうか。森神や獣神みたいなものってこの森いたっけ?というかいつからこういうことしてるんだろ。そう考えながら、一番取りやすい場所にあったりングのような果物を食べた。森神様、居るなら怒らないでね?

結果はリングゴのような味がした。とても美味しかったです。あまりに美味しくて勢い余って野菜やお酒まで全部食べちゃった。途中から子供が見てたことに気づいた俺は、1人で食いきれない量だったから丁度いいと思い、子供を巻き込んで一日中小さな宴をした。動物達も集まってきたりして……すごい楽しかったわあ。



「な、なあ!!大丈夫なのかよ!!」

「大丈夫だつて!!森神かなんか知らないけど、あんな美味そうなもんあのままあそこに置いたままなんて勿体ねえだろ!!」

村の大人達に秘密でお祈りした後の食いもんを食ってみることにした俺たちは、茂みに隠れて大人達が去るのを今か今かと待っていた。

そして、ついに大人達が去った今!!ご馳走にありつこうとしているのだ!!

「よっしゃ!!行くぞ……!!」

「うわぁ……!!」

早速食いもん飛びつこうとした時、横の茂みから誰かが出てきた。

俺たちはその誰かの後ろ姿を見て、それだけで確信した。

「森……神……!!」

あれが、大人達の言う『森神様』なのだ。

森神様は近くにあった果物を掴んでは、品定めするかのように見つめた。意を決して食べると、気に入ったようで他の食べ物も食べ始めた。

あまりに美味しそうに美味しそうなもんを食べるもんだから、体が勝手に前のめりになって、足元の木の枝を盛大に踏み折っちまった。森神様が驚いてこちらを見た。見た

だけでなにか神々しい雰囲気か体に降りかかって前が向けなくなった。

やばい。神様にバレちまった……!!

そう焦っている森神様が近付いてきて、

『ちようど良かった!! 一人じゃ食べきれなかったんだ。一緒にどうかな?』

森神様が軽い口調でそう言ってきた。俺は「へ……?」と呆けるような返事しかできなかった。

なんか…… 思ってた神様と違う……。

その後、一緒に来ていた奴らも呼んでみんなで食べて飲んで大騒ぎした。

すると森から色んな動物が集まってきて森神様に擦り寄った。森神様がちよつと困った顔していた。

その日の夜は動物達も一緒に騒いだ。歌ったり踊ったりした。森神様が踊り下手だったのは面白かったかな。そのままみんなで寝た。

朝起きて、森神様とお別れしてから村に帰った。大人達に凄い心配された。

大人達には悪いけど、夜のこと俺たちの中だけの秘密にした。

番外編 もしも主人公が一人しかいない系の妖怪だった  
ら 中編

あれから…… どれほどの年月がたっただろうか……。

3000?5000?

いや…… 恐らくはその何倍もたったのだろう。

毎年のように行われては、どんどん規模を大きくして言った祭事は、ある時から縮小していった。

祭りのように騒いでいたのが、今や小さな祠のみだ。

お供えも、ある時からパタリと無くなった。

今やこの祠の存在を知っている人間も少ないのだろう。

人間達によって森は大いに削られ、家が建ち、今では立派な集落だ。

この土地は良い土地なのか、祭事が行われなくなっても良い作物がなる土地らしい。

動物達も数を減らし、番を見つけられずに死んでいく子達も増えてしまった。

この森と深く関わったからか、普段いる大きな木の根元でじっとしていても、この森で消えゆく命のようなものを感じ取れてしまう。

特に最近は、動物達の声がめっきり聞こえなくなってしまった……。

そんな風にやさぐれていたある日、森で行き倒れている人間を見つけた。

偶然見つけた俺は、急いで近付いた。

少女だった。まだ歳も幼い子だった。

とりあえず水を飲ませてあげた。

周りを見ると寝にくい場所しかなさそうだったので、仕方なく……仕方なく!!!  
 が抱きしめて休ませた。仕方なくだ。仕方なく。

あれ……？私……たしか、村の子達と森を探検して……迷子になっ  
 て……。

なんだか、とつても温かい……お布団の中みたい……。フワフワして  
 て……。安心して……。ウトウトしちゃう……。誰かが私を見る……。  
 でも、悪い感じしないから……。大丈夫か……。

気がつくとき、森の入口で倒れていた。村の子達が私の周りで泣いていた。私が見たの  
 はなんだったのかな。

夢?..... たぶん夢じゃないんだと思う。あのフワフワした温かい感触が、まだ少し残ってる気がするから.....。

【速報】森に暮らしてウン百年（ウン千年?）、姿を消せることが判明。

え、俺気付くの遅くない?

あと女の子抱きしめるとなんだか..... こう..... 体に力がみなぎるとい  
か..... 滾るといふか..... しっくり来たと言うか。それが俺の妖怪としてのあり  
方なのかな。

妖怪は妖怪として存在するためのあり方があるというのは知っているが、俺のあり  
方って「人を抱きしめて元気になる」ことなの?不審者じゃん。やべーよ。捕まるよ。  
でもそれがあり方なら仕方ないよね..... うん..... 仕方ない。

1300年から1400年代..... 鎌倉時代終期から室町時代初期までの書物に、あ

る奇妙な妖怪が描かれている。ある森の周囲で、女や男の童などが、何かに抱きつかれているような感触を覚えたという。抱きつかれた者は病気や不調が良くなり、家にも幸運をまくという。

『抱鬼（だつき）』『抱きつ鬼』

そう表された妖怪は、土地神のような面もあり、周囲の村の作物は差があれど毎年豊作だったという。

【古今日本妖怪読本より抜粋】

自分のあり方や力がわかってからはや100年ほど。俺はあれから毎日がルンルンだった。可愛い女の子や活発でイキイキした少年を思いつき抱きしめれる日々というのは何者にも変え難い物だった。

色々オーブンになってるかもしれないが、まあ気にしなくて良い。

森の自分の子供とも言える動物達も抱きしめてあげるようになった。

最初は可愛い子供しか抱きしめることはなかった。だがいつからか、人間はおろか動物達や、この森によってくる妖怪なんかも抱きしめるようになった。

趣味に合った子を抱きしめるのが趣味だったのが、今では誰かを抱きしめるのが趣味のハグ魔になっていた。

なんだろうか。生きているだけでそれが綺麗に見えて、なんとも愛らしく感じてしま  
うのだ。

そんな幸せな日々を過ごしていた時、俺の人生を変える出会いがあった。

「こんにちわ………キヤアツ!？」

「紫様!?! 貴様あ!!」

少し胡散臭い雰囲気を漂わせた金髪の美女が、どこからともなく湧いて出てきた。

手癖で抱きしめてしまった。初対面で失礼しました。

近くにいたこれまたキツチリした雰囲気美人に怒鳴られながら蹴られてしまった。  
痛い。

「紫様!! 大丈夫ですか!?! お持ちしててください!! 今すぐこの汚らしい男を八つ裂きにし  
て差し上げます!!」

「待って!! 藍待って!?! 今回の取引相手がおとk「天誅うううううううう!!」らあああ  
ああん!?!」

御札片手に殴り掛かってくる女性をよく見ると尻尾とか耳とかが出ている。この人  
も妖怪か?

何はともあれ……。

「そりゃ!!」

「ひゃん!!こ、このお!!」

話は抱きついてからだ。殴り掛かる手をとりあえず避けて体の方を抱きしめる。すぐに離れられたが。

「ちええすとおおお!!」

「よいしょ!!」

「ぐはっ!?き、貴様……!!」

蹴ってきたところを避けてもう一度抱きしめた。今度は抜け出さないように足を絡めたりして固定したりした。

それでもまだ暴れるので…… ふんっ!!

バキッ!!

「あがつ!!腰が…… 腰が……!!」

バキッ!!ビキッ!!

「アッアッ!?やめ、やめろ……!!」

「暴れられたら困る。まだ抱きしめ終わってない」

「そもそも抱きしめるってなんだ!」



鯖折りがかなり聞いたらしく、立っていられなくなったのか膝を折ってしまった女性  
を、支える形で抱きしめる。

「ゆかり、さま……………毒牙にかかる、前に……………お、お逃げ……………  
い……………」

「……………何をさせられているのかしら私」

呆れた雰囲気を出した女性が咳払いをして、自己紹介を始めた。

「ごほん。私は八雲紫。幻想郷と呼ばれる場所の管理人のようなものです。ソレ  
は……………私の式の八雲藍ですわ」

「これはご丁寧にも。俺は……………名前無いです」

「ぐう……………いつそ殺せ……………」

「あの……………そろそろ離しても……………いやそんな『あげないもん』みたいな顔しない  
で……………一応私の式ですから……………」

名残惜しいが離すことにした。

「藍、あなた大丈夫？」

「ゆかりさまあ……………汚されてしまいましたあ……………もうゆかりさまのお嫁にいけま  
せん……………」

「大丈夫じゃないわね。特に頭が」

そういえこの2人はなんでここに来たんだろう。

いきなり現れては殴られたし。

「あの、今日は何をしにここへ……？ここには森しかないですよ？」

「単刀直入に伝えさせてもらいますと、あなたを幻想郷に勧誘しに来ましたの」

幻想郷………だと!?

なにそれ。

## 番外編 もし主人公が一人しかいない系の妖怪だったら

## 後編

四つん這いで腰を気遣いながらこちらを睨んでくる藍と呼ばれていた女性を脇目に、紫さんから話を聞いていた。

「えつと、つまりその、幻想郷？つてとこに移り住んで欲しいってことですか？」

「ええ。そういうことになりますわ」

どこからか出した扇子で口元を隠しながら細かい説明をしてくれた。

なんでもそこは、現代で忘れられてしまった妖怪やその種族が安心して暮らせる、まさに理想郷のような場所だという。

へーいいなあ。つまりは見たことも無い他の妖怪の子達を抱きしめゲブンゲブンお話しができるってことかあ。なんだ楽しそうじゃないか。

一応動物達のことを聞いてみたら一緒に送ってくれるという。やったぜ。

断る理由もないしみんな「俺についてくる人この指とまれ」って誘ってきた。

4匹しか来なかったけど。ベベ、別にないてねえし。

「えーつと左から虎のシロくんになんかの鳥のスーちゃんと亀のゲンブーに元コイのア

オだよ。仲良くしてあげてね」

「……………」

ん？なんか固まって………… あ、コラ!!シロくん!!アオに突撃しないの!!メツ!!スー  
ちゃんばげんぶーの上に乗らな…………… なんだ平気そうだな。

「前々からやばいやばいとは思ってたけどまさかここまでなんて……………」

ええ？なに今なんつったもう一回言ってみおおん???(純粹な疑問)

「いえいえいえいえべべつになんでもないですことよつほつほつほ」  
だつたら良いんだけどね。

じゃレッツツゴー!!ビバ幻想郷!!ひやつほ!!

…………… つて意気込んでから3週間。

幻想郷の端っほいとこにある森を貫つたには貫つたんだけど……………。

「なんで誰も来ないんだあああああ!!!」

人通りす少ないとかそうじゃなくて!!!居ないの!!!虚無!!!かんつつぜんに誰も来ない!!!

!!!!

あつちにいた頃は少しだけ人通りはあつたのになあ!!!!

はあくやばい。禁断症状が出る出る出る出る出る出る出る出る出る出たわ(諦め)自分の身体抱きしめてクネクネする禁断症状出たわおいおいおい(社会的に)死んだわこいつ人肌が恋しい恋しいこーいーしーいーいーいーいー!!! 誰でもいいから抱きつきたい!!! もうそこら辺の木でいいかな(末期)

……!? 足音!? 足音がするよ!! ああ? 可愛い足音? あんよが上手? あんよが上手?

こつちに近ずいてるねえ? わかるよお兄ちゃんにはわかるよお?

3...

2.....

1い.....!!!

「そりやああああ!!!?」

「え、なに、きやあ?!?」

ははくん? この筋肉の付き方や手の細さ的にかわゆい女子じゃなあ? 女子など久しぶり過ぎてお兄さん感動しちゃう!!!?

女子のいい所はなんと言ってもこのフィット感よ!! 自分の体で包んで大事に優しく

抱きしめることが出来るというのはなかなか母性を擦られると同時に単純に抱きつきやすい!!

それにこの身長だと年は13か5くらいかにかやく? いやく役得役得? いや役なんてないけどね。

大丈夫だからねく? 怖くない怖くない? お兄さんに抱きつかれたらなんか体の調子良くなるらしいよ?

「こんの…… !! 離れろへんたあああああ!!!」

ゴンツ!!! と鈍い音が俺の顎から聞こえてきた。!! あと鈍痛も。

「ごっつふああ!!!」

薄れる意識の中、俺の視線には紅白の服が見えていた。

「へえく博麗の巫女って言うんだね」

「……………」

「でもなんでこんな端の森に? なんか用でも?」

「……………」

「まあ用でも無かったらこんな所来なかったか!! あはははは!!」

「うっさいわねこの変態……!!」

「まあまあ霊夢。落ち着いて。ね?」

目が覚めた後、そこに現れた紫さんの話を聞くと、この女子は幻想郷のバランスを保つのに一役買ってる【博麗の巫女】という役職のまあなんて言うかお偉いさんらしい。

彼女は紫さんの紹介でこの様子を見に来たらしい。そこで俺の餌食になったと。

可哀想（小並感）

「っていうか紫、この変態どうなってんのよ。神力とか感じるし、変態ほどじゃないにしてもちらほら神力をこの森から感じるし。肩のコリが少し取れたし、なんか変よ……」  
今のうちに駆除しましょうよ」

「霊夢!?なんてこと言ってるの!! そんな子に育てた覚えはありません!!」 「育てられた覚えなんか無いわよ」

はえ? ……ここってそんな変な森なんすね。楽しそう（馬鹿）

そう考えていると何やら2人でコソコソ話してた。

「それはね霊夢…………… コシユコシユ」

「…………… はあ? この変態が?」

「信じられない？同じよ」

何話してるか気になるけどスルーしとこう。難しい話だったらやだし。

そこから紫さんと話して、森を一般開放的なこととして人通りは増やすそう。やったあ  
!!

ここからが俺の幻想郷ライフじゃああああああい!!!

それからしばらく後、吸血鬼異変の解決に少し活躍したり逆に異変を起こしたりと、色々するけどそれはまた別の話。